大館市史編さん調査資料第５集

大館市片山

舘コ

発掘調査報告書

第１次

１９７３・３

大館市史編さん委員会

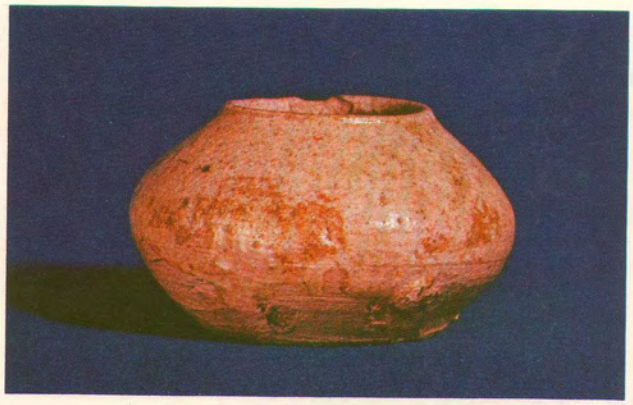
大　館　市　片　山

鎗　コ

発掘調査報告書

秋田考古学協会員　奥山　潤
秋北バス社員　高橋昭悦
大館市史専門委員　田中修造
秋田考古学協会員　小山純夫
秋田考古学協会員　板橋範芳

1973・3



例　言

1　この報告書は，大館市史編さん委員会が実施した，市内片山所在の一遺跡に関する報告である。

2　この調査の法による発掘責任者は市長石川芳男であり，発掘担当者は，前市史編さん委員奥山潤である。

3　この報告書の遺構全体の写真，遺物写真は写真家越前貞一氏により，一部が参加調査員の小山純夫による。

4　遺物のうち口絵陶器及その破片は写真で示した。撮影は国士館大学大門直樹氏による。

5　この報告書のうち，掘立柱の建物，陶器，鉄器等については，担当者の指示により，秋田考古学協会に所属する板橋範芳がこれに当り奥山が補筆した。

6　この報告書の構成は奥山が担当した。

目　　次

例　　言
Ⅰ　遺跡の発見と予察 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
Ⅲ　発　　掘 …… 8
A　舘コの構造 …… 8
B　竪穴群とピット状遺構 …… 10
C　掘立柱建物 …… 20
Ⅳ　出土遺物 …… 21
A　土　　器 …… 21
B　石　　器 …… 23
C　鉄　　器 …… 23
D　陶　　器 …… 23
E　銭　　貨 …… 26
F　炭化米と粟 …… 26
G　木　　器 …… 26
Ⅴ　考　　察 …… 27
A　出土遺物について …… 27
1　土器と石器 …… 27
2　鉄器について …… 30
3　陶器について …… 30
4　銭貨について …… 31
B　遺構について …… 32
1　竪穴について …… 32
2　ピットについて …… 33
3　掘立柱建物について …… 34
4　舘コ構造について …… 36
Ⅵ　総　　括 …… 37
謝　　辞 …… 38

図・図版目次

図

Fig 1　試掘時の記録 …… 2
Fig 2　遺跡位置図 …… 7
Fig 3　遺跡附近地形図 …… 折込
Fig 4　舘コ平面実測図 …… 9
Fig 5　発掘全体図 …… 10
Fig 6　第1，4号竪穴実測図 …… 11
Fig 7　第2，7号竪穴，ピットF実測図 …… 13
Fig 8　第3，10号竪穴実測図 …… 14
Fig 9　第5，6号竪穴実測図 …… 15
Fig 10　第8号竪穴実測図 …… 17
Fig 11　第9号竪穴実測図 …… 17
Fig 12　第11号竪穴実測図 …… 18
Fig 13　建物Ⅰ・Ⅱ，ピットA，B 第12号竪穴 …… 20
Fig 14〔1〕出土土器拓影　出土石器 …… 24
Fig 14〔2〕出土鉄器 …… 25
Fig 14〔3〕銭貨拓影 …… 26

図版

口　絵	第12号竪穴出土薬壺	
PL 1〔1〕	発見情報として示された舘状遺構	3
PL 1〔2〕	舘状遺構の部分と試掘トレンチ	4
PL 1〔3〕	試掘のBトレンチと北端の小方形竪穴	5
PL 2	シラス台地の断面	7
PL 3〔1〕	舘コ遠景　東より	39
PL 3〔2〕	空　濠　東より	39
PL 4〔1〕	第1，4，5，6号竪穴　西より	40
PL 4〔2〕	第1，4号竪穴　北より	40
PL 5	第1号竪穴　北より	41
PL 6〔1〕	第2，3，7，10号竪穴とピットF　南より	41
PL 6〔2〕	第2，7号竪穴　北より	42
PL 7〔1〕	第3，10号竪穴　南より	42
PL 7〔2〕	第3，10号竪穴　北東より	43
PL 8	第5，6号竪穴　北より	43
PL 9〔1〕	第8号竪穴　北東より	44
PL 9〔2〕	第9号竪穴　南東より	44
PL 10〔1〕	第11号竪穴　北より	45
PL 10〔2〕	第12号竪穴とピットA　北より	45
PL 11〔1〕	ピットA，B　北西より	46
PL 11〔2〕	ピットE	46
PL 12〔1〕	建物Ⅰ　北より	47
PL 12〔2〕	建物Ⅱ　西より	47
PL 13〔1〕	後北式土器，中段右は左側土の裏面	48
PL 13〔2〕	天王山式，擦文式土器，石器	49
PL 14	陶器1（左列）4（右列）	50
PL 15	陶器2，3，5，6	51
PL 16	陶器7，8，9，10，11	52
PL 17	鉄器1，2，3，5，6	53
PL 18	鉄器4　銭貨	54
PL 19	木器，炭化米	55

Ⅰ　遺跡の発見と予察

この報告の遺跡は，大館市片山の二ツ山の東側の台地にあり，舘コ（タテコ）と呼ばれている。われわれにとって，この遺跡は未知のものであった。たまたま市史編さんの調査方針によって，市中に分布する石造記念物を実査中の前市史資料調査員小山純夫が，先史遺跡分布調査をかねて，このあたり片山野と呼ばれる一帯を調査中，単純な形態ながら，空濠と土塁を備えた「タテ」と考えられる遺構を発見し，奥山に報告した。〔PL１〔１〕，〔２〕上〕

古代，中世史部門も担当する第一部会は，かねてから「タテ」の究明を企画していたが，1967年6月25日（日），その一部に予備発掘を実施した。

発掘の指揮は奥山，調査員は前市史資料調査員高橋昭悦，市史専門委員田中修造，市史編さん係板橋範芳で，発掘員は県立大館桂高校社会部考古学班員11名，仝大館工業高校社会部員９名である。

試掘は空濠よりに，ほゞこれと並行の，幅 1.5m，延長20.5mのＡトレンチと，その西端近くから，これに直角に北にのびる幅 3.3m，長さ約10mのＢトレンチを設定して行われた。

概要は次頁のFig１やPL１〔２〕，〔３〕に示す通りである。

Ａトレンチ東端部に，長軸 2.3m，幅 1.8m，長軸方向東西で，西半部が 1.6mの深さをもち，中央部に大きい２個の扁平な河原石を横に並べたピットが発見され，西端部に，小型方形の浅い竪穴の一部と，これに切込んだ浅い長方形らしい竪穴，その傍らに円形のピットらしい遺構が出現し，土器片が数片発見された。Ａトレンチの中間には数本の柱穴が発見された。

Ｂトレンチの南端近く，数本の角柱の掘立柱跡，２個所の馬蹄形の野外炉址と考えられる焼土部分のほかに，トレンチ北端に，小型方形の，深い８本の柱穴を残し，北東の一辺から外に張り出した入口を備えた竪穴が出現した。竪穴は，最初剝土した時に出土した大量の炭化した萱の下から出現した。屋根かと思われたが，屋根とすれば，炭化した柱などが残っていないのが不可解である。

Ａトレンチピットの土器は，Fig１に示した拓影の土器などで，一種の有段，または初期的な擦文式土器で，※土師器ではないらしい。

土師の小片も，石刃または金属製の刃物の痕と思われる条痕があり，この地方の土師器と趣きを異にする。また北に入口を設けた小竪穴は，北風の卓越するこの風土の，全天候用の竪穴としては条件が悪い。竪穴のせまさは，中に焚火をするには不適当である。この竪穴の性格，わずか２，３片の出土土器は，しかし浅い空濠を伴ない，三方か急斜面をなし，すぐ北の低地に長木川が流れ，西方近距離で米代川本流に入る位置にあるタテ状遺構と結びついて，充分な発掘価値を持つものと判断された。タテについては，現在まで全くその機能が不明である。構造のみによって推断することはできない。また北海道のチャシと関連があろう。これらの問題を解明する資料が得られることを期待して，本格的発掘に委ねたい。

※　石附喜三男「北海道における末期古墳と問題点」　古代学研究　64　1972・8

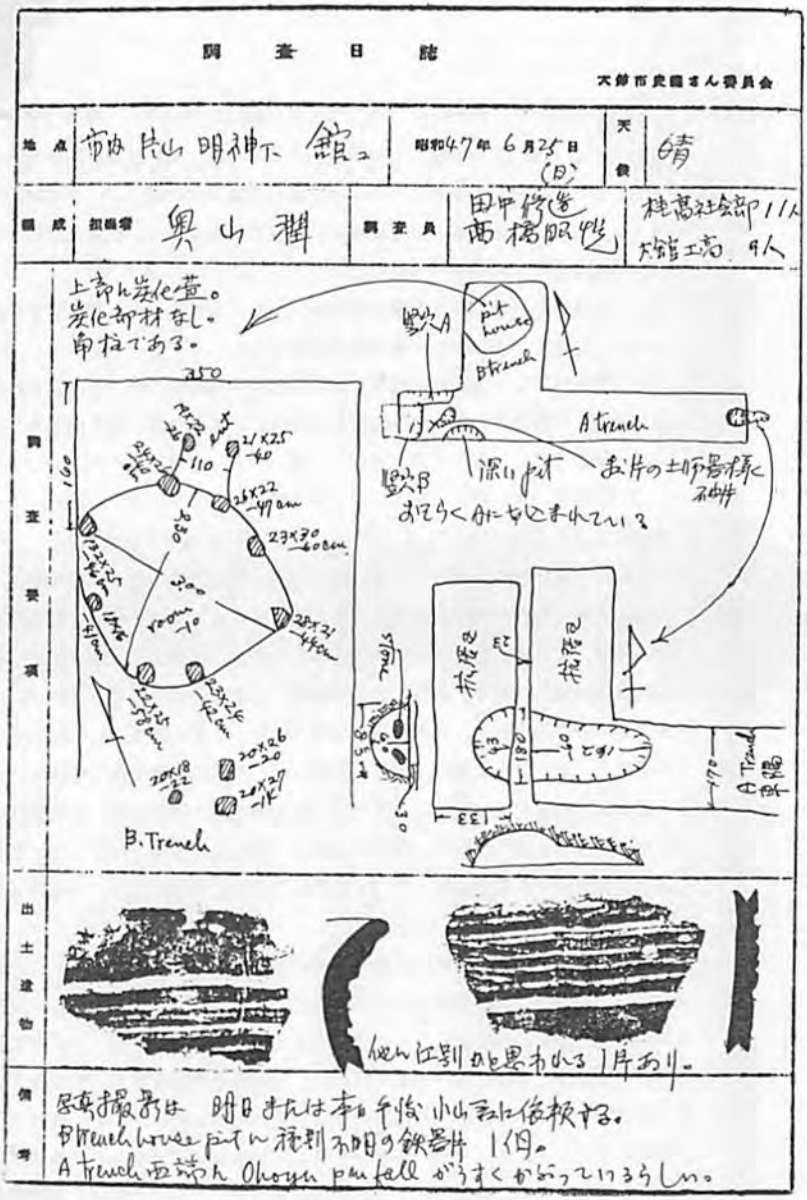

調査日誌
大館市史編さん委員会
地点
昭和47年6月25日(日)
天候
晴
構成
調査員
田中修造
高橋昭雄他
桂高社会部11人
大館工高 9人
調査要項
上部に炭化萱。
炭化部材なし。
掘穴A
pit house
B trench
A trench
掘穴B
深い pit
おそらくAにもとまれている
B. Trench
A trench 東端
出土遺物
他に区別出来る1片あり。
備考
写真撮影は明日または本日千俊小山氏に依頼する。
B trench house pit に祖別不明の鉄器片 1個。
A trench 西端に Okozen pan fall がうすくかぶっているらしい。

Fig 1　試掘時の記録

西北二ツ山から。
手前右建物の左にのびる
台地が「舘コ」

空濠と考えられた低凹帯。
東から

中段と見られる構造。
下方枯れたカヤの上縁が
中段。

PL I 〔1〕　発見情報として示された舘状遺跡

北方の端部。道路より左斜めにのぼる細道が見られる。

第Ⅰ次発掘のAトレンチ。東端のピット

全トレンチ西端部分。竪穴の一部。

PLⅠ〔2〕　舘状遺構の部分と試掘トレンチ

第１次発掘のＢトレンチ

仝上トレンチ北端の竪穴

PL１〔３〕　試掘のＢトレンチと北端の小方形竪穴

Ⅱ　遺跡の立地と環境

遺跡に立って西の眼前が二つ山である。南側は平坦な台地が広がり，北の一帯は低い水田と川とその対岸に山なみがある。

館コと呼ばれるこの地点は，大館市街の中心から，国道7号線を西へ約 1.5km，陸橋を渡った片山の集落から，台地の北縁にそう旧道を北東に約1.5kmで，二つ山の東麓からわずか 400mを距てた位置である。〔Fig 2〕

遺跡のある台地は，大館市街がのる台地の上位面と同一面で，その上表部は古地形の低部を埋めて流下した，古十和田火山の熱雲堆積物である火砕流とその二次堆積物で，特徴的な平坦面を構成する。この平坦な段丘は，遺跡の北側を西流する長木川に，南側を同じく西流する米代川の側面浸蝕をうけて削られその後，この両河岸の低地に向って流れた小さい谷の発生とともに凹凸を生じ，同時に河の蛇行によって浸蝕される部分も加わって，場所によっては，舌状の突出部を形成している。火砕流の二次堆積物の上には黒土層が重なるが，河による堆積物は見当らない。

大館市街から連続するこの段丘は，二つ山の西側では米代川に，下内川を合せて水量を増した長木川が合流することによって二つ山西麓側で断ち截られ，低位面に変貌する。

PL 2は，遺跡の西南約 800mに新築された，県立大館桂高校の屋外運動場造成の際の掘り下げ法面である。黒土層下に水平な縞状をして堆積している地層が火砕流の二次堆積物で，この地方でもシラスと呼ばれ，その下層位に，上面を浸蝕されたあまり厚くない優白の地層が十和田火砕流のうちの一層である。以下はやゝ平坦な面を示す礫層で，この写真には現われていないが，層下に，樹木を包含する有機質で吸水性の強い，黒色粘土層がある。この層序は北縁部でも同じと推定される。礫層は地下水を滞水し，あまり良質ではない。遺跡の斜面下には湧泉がある。〔Fig 4←〕

シラス台地は，風化浸蝕を受けた場合，その段丘崖は急斜面を形成して安定する。その特性と，同時に雨水による下刻性が強いことから生ずる小谷によって，いわば縦のひび割れと，台地下の湿地帯や，近くを流れる河川などの地形をも加えて，これが砦状の堡塁を造成するに甚だ都合のいい条件となる。

館コといわれるこの地点は，火砕流に据を埋められ，突出する二つ山が河下よりの北西風を防ぐとともに頂上からは四方を遠望し，川を利用しては，近距離で米代川に入る水運にめぐまれている。台地面のわずかな低湿部や長木川畔の冲積面を利用しての稲作，古くは長木，下内両川を溯るサケマスなど淡水魚，その他食糧捕獲にも適した恰好の地であった。

台地の標高は，館コが57m，南側の道路で60mぐらいで，眼下の水田低地は50m～48m，その比高差は約10mである。二つ山々頂は 126mであるが，台地よりの比高約65mである。〔Fig 3〕

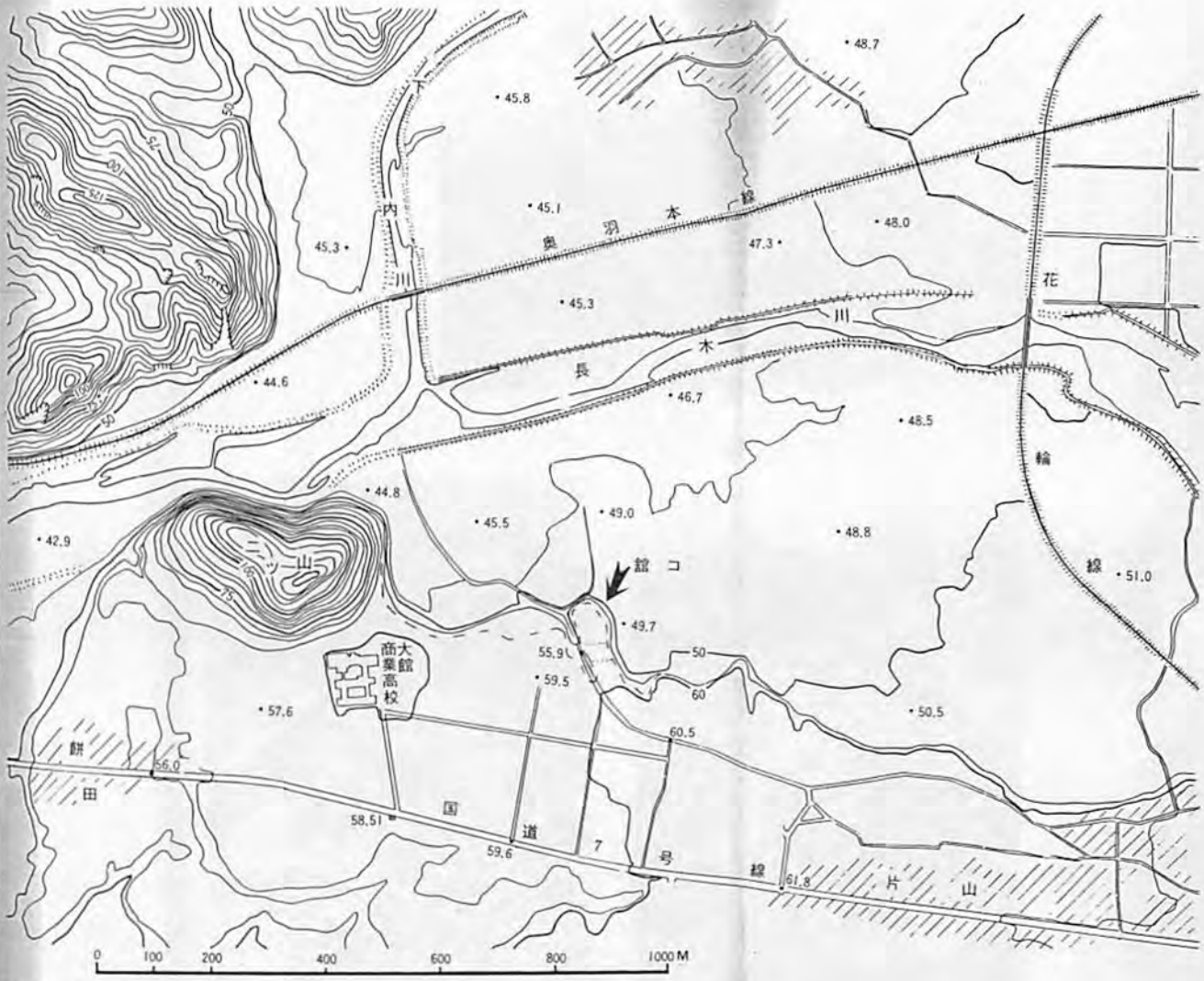
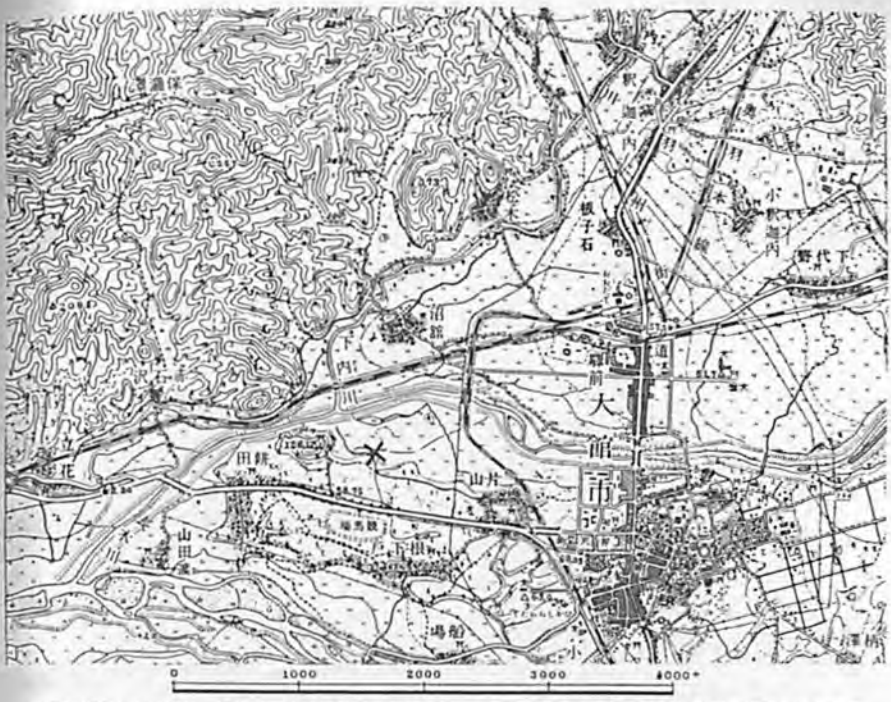


Fig 3　遺跡附近地形図

この地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の5000分の1国土基本図を複製したものである。

承認番号　昭48　第386号



本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１の地形図を複製したものである。承認番号　昭48　第366号　　Fig 2　遺跡位置図　×印

PL 2　シラス台地の断面

Ⅲ 発　　掘

館コがいかなる種類の遺跡であるかは，目下のところ言明すべき段階ではない。たゞ全体構造が，構築当時，おそらく「サシ」 ―たとえば鹿角市小技指のように― と呼ばれた種類のもので，いわば砦または堡塁であると表現できよう。本章ではその構造的外形，その発掘によって発見された竪穴群と掘立角柱建物について，記載する。

A 館 コ の 構 造

その主体部は，河成段丘が河の側面浸蝕によって削られて残存した，いわゆる舌状の突起部の恰好の地形を選択して造られている。

Fig 4 はその平板実測図である。台地舌状部の規模は，東西約40 m，南北 160 mで，そのほゞ中央に，現幅約20 mの浅い空濠がある。

この空濠によって，館コは南北の平坦な二部分にわかれる。今次発掘は，このうち北部の空濠北縁にそう小部分である。

舌状部の基部，つまり南端には，図のように並行する三重の土塁がある。土塁は舌状部の両縁にまで達し，その南側，道路との間は低湿地でわずかの雨でもぬかる。ここに幅広い空濠があったかどうかは，現在明らかでない。

三重の土塁の間隔は約 2 mほどで，現存する各塁の高さは50cmほどである。

また舌状部の東西両斜面には，低位面との間に中段がある。この中段は段丘中位面か造築によるものか現在明らかでないが，上記堡塁と空濠間の東側では，上面からの高差約 5 mで，空濠より北の東側は上面より 2 m低い。つまり，空濠の北部東斜面の中段は空濠南部側東斜面中段より高い。

また西側の斜面も，ほゞ舌状部北西隅から空濠までの間に中段がある。この西側の斜面下を北に通じる道路がある。おそらく旧道であろう。

なお前記空濠の南側は，空濠中の畑の耕作のため南縁を削り崩してあるので，原状は不明になっているが，当然現在より幅狭く，かつ深かったものと考えられる。

中央空濠で区切られた北部は，南北55 m，東西40 m，南部は南北75 m，東西35 mである。

今次の発掘では，この砦状ないし館状の堡塁そのものの原型をたしかめるための発掘は行わなかったので，単なる外観の記述にすぎない。

なお北端外は地形の説明でされたように，低地帯であるが，河跡による沼沢のようなものがあったかどうかは不明である。

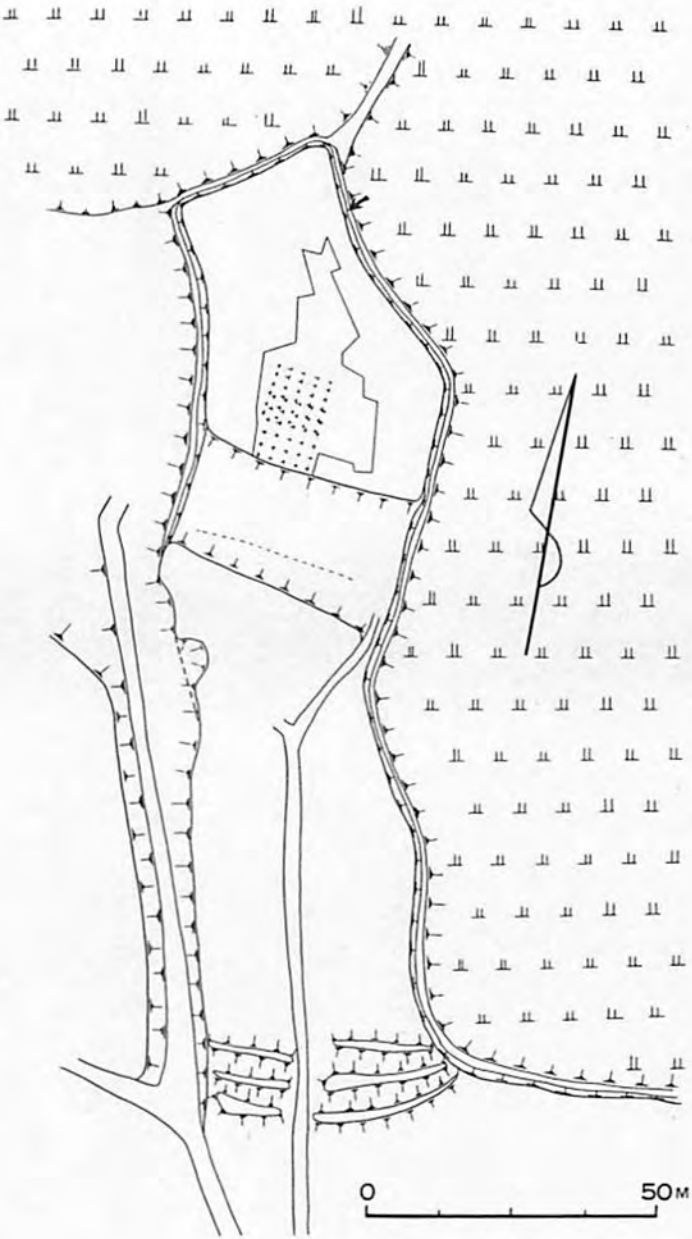


Fig 4　舘コ平面実測図

B　竪穴群とピット状遺構

Fig5の全体図に図示したように，第1次発掘（予察）を含めて，方形ないし長方形の竪穴遺構，各種ピット発見した。以下図の番号順に実側図と写真図版によって説明する。出土遺物については，D項にゆずる。

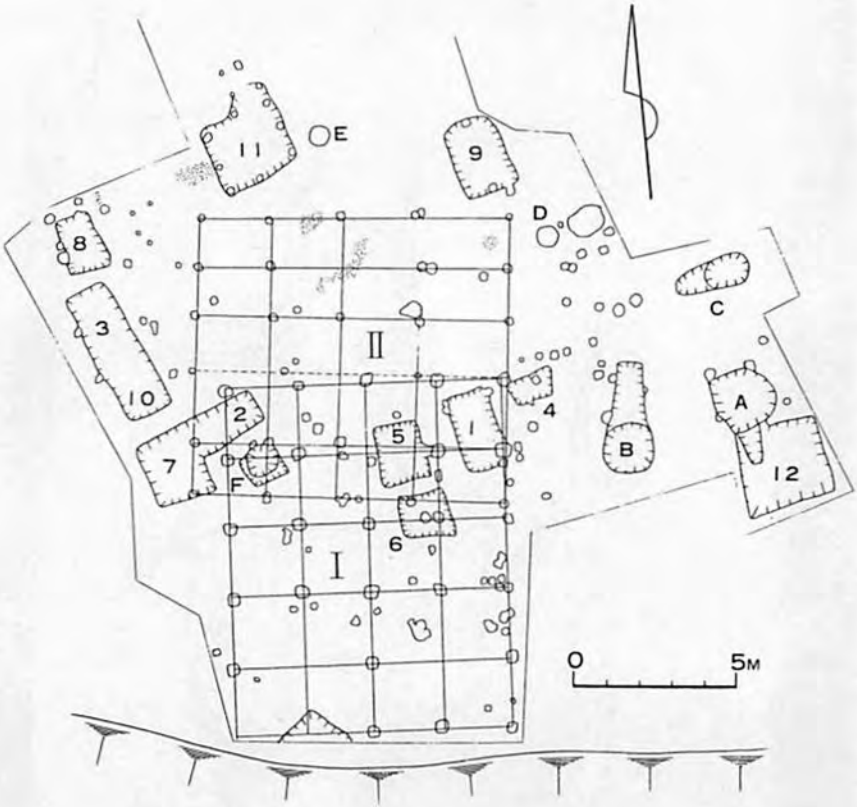


Fig 5　発掘全体図

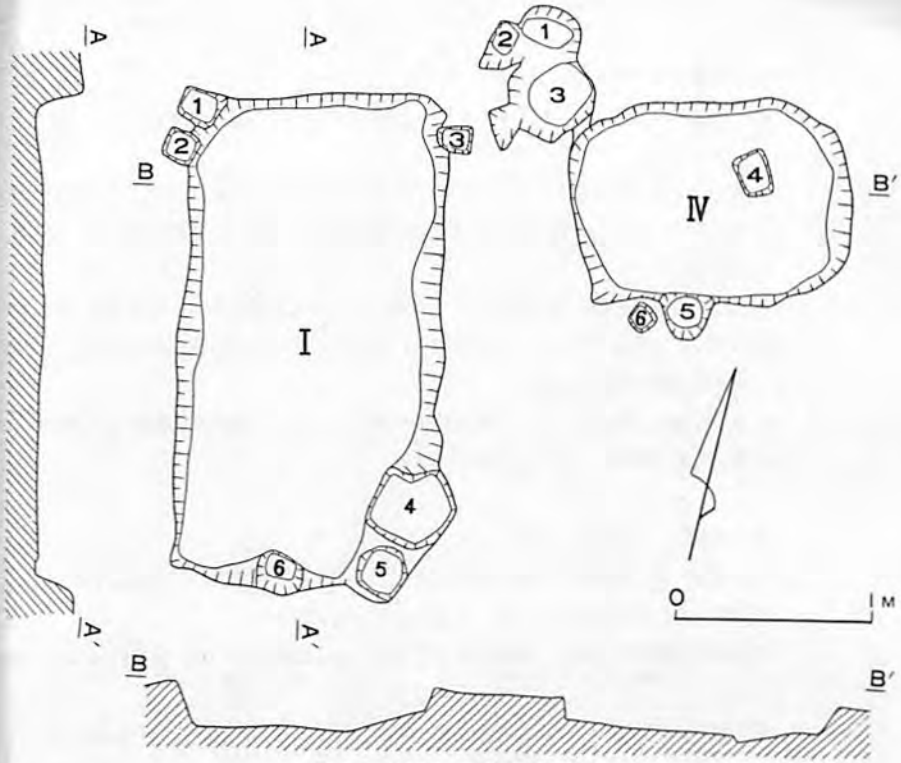


Fig 6　第1，4号竪穴実測図

竪　穴　群

第1号竪穴　〔Fig 6，PL 4〔1〕〔2〕PL 5〕

長軸方向南北の長方形竪穴で，長辺1.43m，短辺は北側で1.24m，南端で1.44mを計測する。深さは20cmで，床面は硬いが平坦でなく，やゝ波状を呈する。柱穴は6本，竪穴周辺に認められるが，第4の竪穴南東隅の大きい柱穴は，後世の掘立角柱の柱跡である。床面からFig 14—2，4の土器片が出土し，中央東よりに細長い河原石2本が八字形においてあった。

竪穴南東隅に近い地山面に，青磁らしい陶片1個が出土した。

隣接の第5号竪穴壁縁と，この竪穴の西縁は，約1.2mを距て，東側の第4号竪穴との間は62cmである。

第4号竪穴　〔Fig 6，PL 4〔1〕〔2〕〕

第1号竪穴に隣接，その東側にある，ごく小規模の竪穴であるが，やゝ東西に長い。長軸は東西で，東西に1.4m，南北約1mの小さなものである。床面は東に向け緩傾斜を示す。壁高10cmほどである。竪穴内から釘様鉄製品が出土した。床面に火を用いた形跡はない。

第2号竪穴　〔Fig 7，PL 6〔1〕〔2〕〕

第1号竪穴の北西にやゝ距てて発見された長方形プランの竪穴のひとつで，予察時にその一部が明らかになっていた，第7号竪穴に切込まれている。

長辺約 2.4 m，短辺約 1 mで，長軸の方向はほぼ東西。床面は硬いが，中央部を境に，それぞれ東と西方向にわずかに傾斜している。壁高は約10cmで，内側にわずかに傾いている。床面に火を用いた跡はない。

南側わずか距てゝ深い円筒状のピットがあり，これと重複する第7号竪穴との中間の地山から，数片の土器片〔Fig 14－6，10，11，15，16〕が出土した。周辺の柱穴は3本あり，うち第3のものは，掘立柱建物の柱跡である。

なおこの部分の竪穴や，ピット開口部の一部に，うすい火山灰様の断続する層があったが，降下浮石層（大湯浮石層）か否かは不明である。

第7号竪穴　〔Fig 7，PL 6〔1〕〔2〕〕

第7号竪穴は，前記第2号竪穴の西側短辺と膚接，または切込みの関係にある。

長軸は南北，南北辺が2，3 m，東西辺は 1.7 mを示す。

床面は中央部がやゝ高く，南北にそれぞれやゝ強く傾斜している。壁高約15cmで，内側へ傾斜している。

関係柱穴は7本で，5は後世の掘立柱建物の柱跡である。火気を用いた形跡はない。

第3号竪穴　〔Fig 8，PL 6〔1〕PL 7〔1〕〔2〕〕

第2号竪穴とはL字をなすように，近くにある。小型の第10号竪穴と接触している。その間，わずかに断面Λ形に，両竪穴の南北両端の壁と考えられる部分が残っていた。

長軸の方向は南北で，長辺 3.5 m，短辺は 1.7 mほどの長方形。約6平方mの床面である。

柱穴は5本であるが，1と2がこの竪穴と関係ある柱穴と推定された。床は硬く平坦で，深さ約20cmである。ここにも火を焚いた形跡はない。

床面近くFig14－7の土器片が出土したが，あるいは第10号竪穴のものかもしれない。

北にすぐ第8号竪穴が見られる。

第10号竪穴　〔Fig 8，PL 6〔1〕PL 7〔1〕〔2〕〕

第3号竪穴の南端を占め，きわめてせまい東西軸の長方形プラン。第3号竪穴とは同じ幅であり，また東西両壁も，第3号竪穴の長壁方向の延長の様に見えるが，両竪穴間には細い壁が残存している。

東西 1.4 m，南北 0.7 m。壁高15cmで内側に傾く。

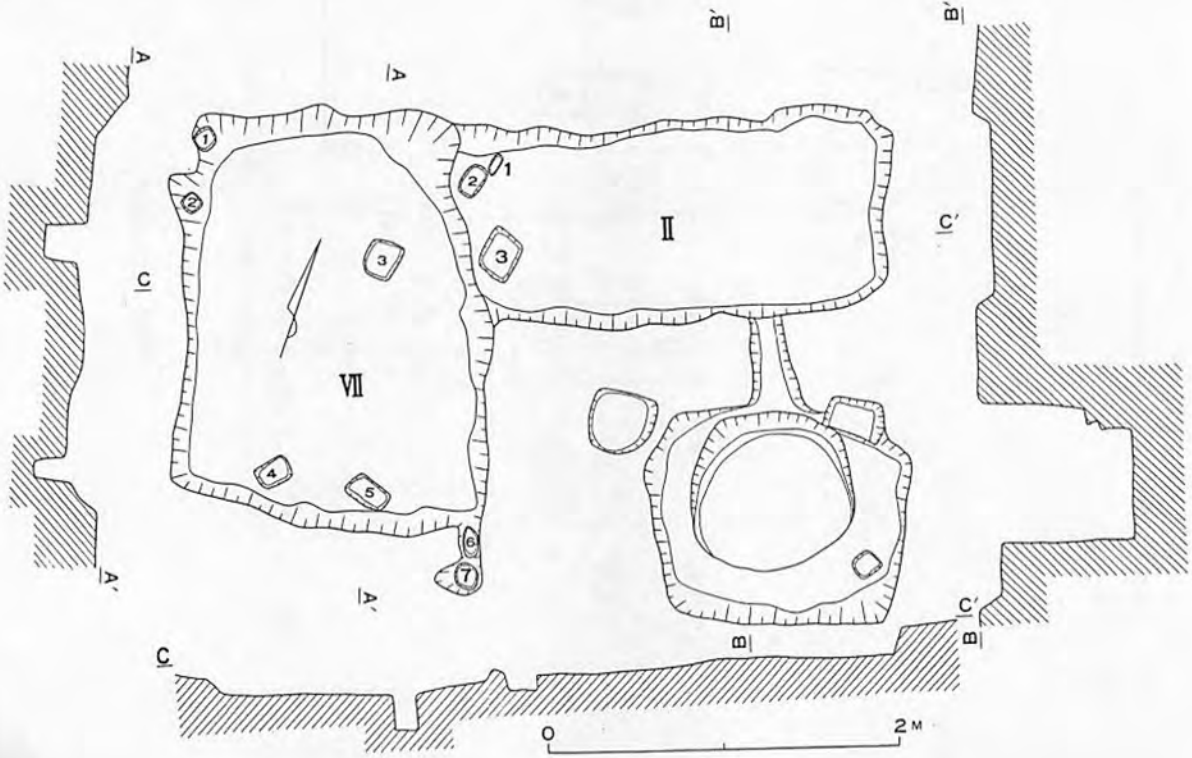


Fig 7　第2，7号竪穴，ピットF実測図

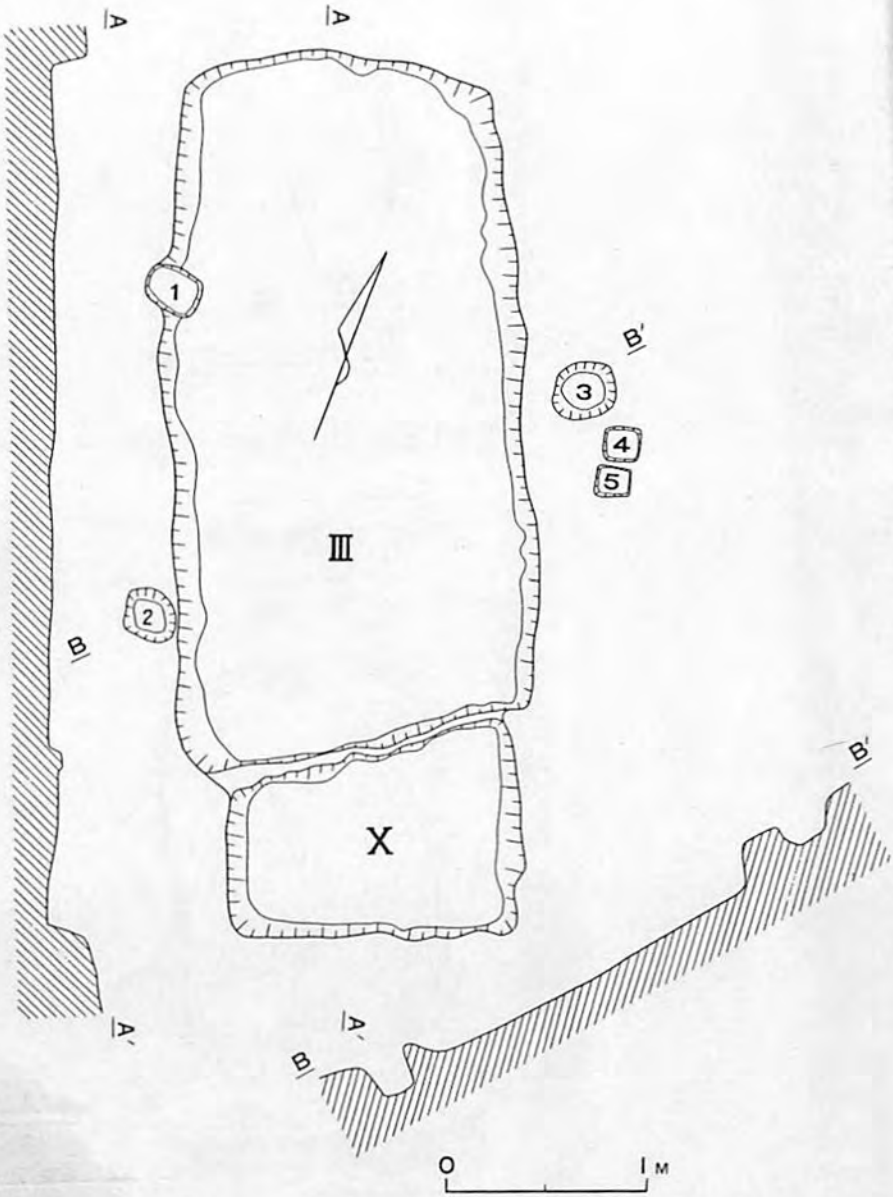


Fig 8　第3，10号竪穴実測図

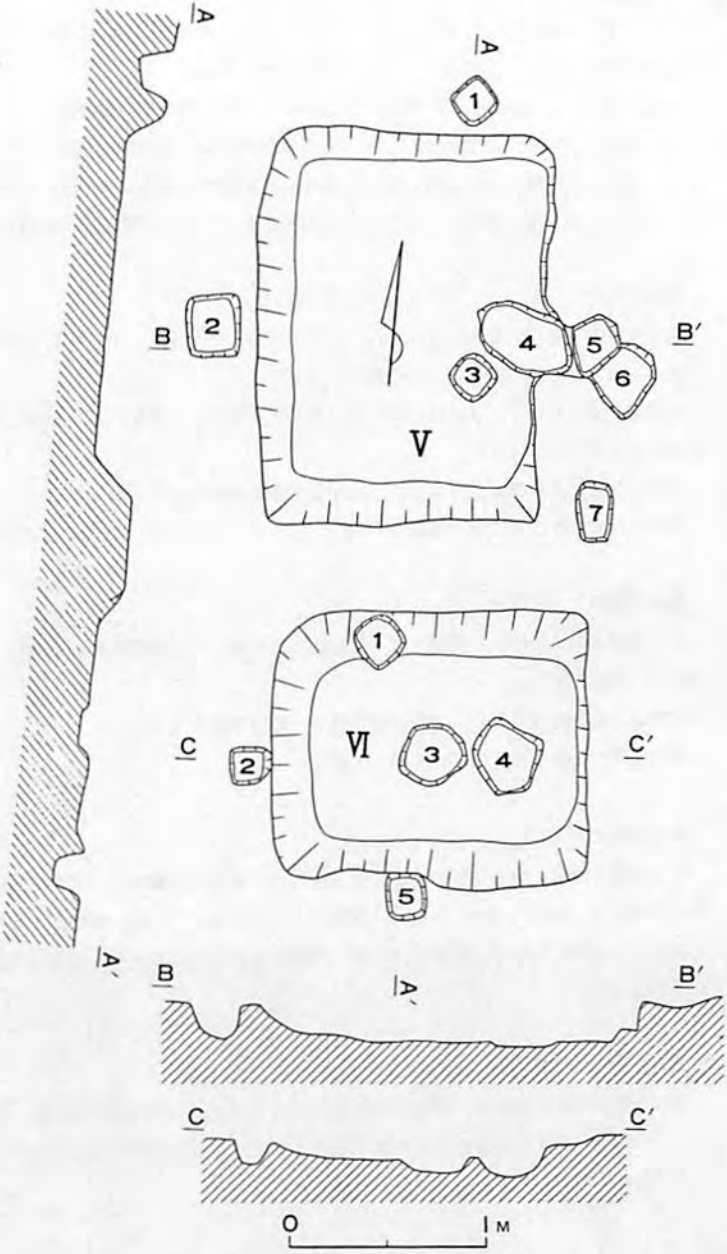


Fig 9　第5，6号竪穴実測図

第5号竪穴　〔Fig 9，PL 4〔1〕PL 8〕

第1号竪穴の西に接し，第1号竪穴とは，わずか1.6mを距て，長辺が平行する長方形プラン。長軸の方向は南北で，長辺が1.9m，短辺1.4mを測る。

床面はほぼ平坦で硬い。竪穴壁高は約20cmで，内側にゆるやかに傾斜する。

検出された柱穴は7本であるが，4，6は後世角柱掘立柱建物の柱跡である。

この竪穴の北西隅，ほゞ地盤に近く，細かい糸切底の土師器片が出土したが，他に〔Fig14—13〕など3片の土器が床面から出土したのみである。床面に火気使用の形跡はない。

第6号竪穴　〔Fig 9，PL 4〔1〕DPL 8〕

第5号竪穴の南側の短かい壁縁から，わずか50cmへだてて，これと平行な壁縁をもつ，幅1.4m，長さ1.6mの歪んだ方形プランの小竪穴である。

床面は比較的軟かく，壁高約10cm，第5号竪穴と同じく，内側へゆるやかに傾斜した壁である。床面に火をたいた跡はない。

柱穴は周辺5本を検出。うち1，2は後世の掘立角柱建物のそれである。

竪穴内から，3本歯の錐状鉄器〔Fig14〔4〕〕が出土した。床面に火を用いた形跡はない。

第8号竪穴　〔Fig10，PL 9〔1〕〕

第3号竪穴の北に接し，長辺1.7m，短辺1.1mの，長軸方向南北の長方形プランである。壁高10cmで，内側に傾く。

柱穴は6本を検出したが，5だけが円柱で，他は角柱である。

床面は硬く平坦であり，火気使用の形跡はない。

第9号竪穴　〔Fig11，PL 9〔2〕〕

第3号竪穴の東，第4号竪穴の北，やゝ離れて，南北の長軸をもつ竪穴であるが，短辺は1.8m，南北の長辺は，直距2.6mであるが，東側に大きく外弯している。柱穴は4本検出され，1，2が主柱となるものであろう。壁高約10cmで，内側にきわめて緩く傾き，床面は平坦で硬く，火気使用の形跡はない。

第11号竪穴　〔Fig12，PL10〔1〕〕

第8号竪穴の東にあたる。予察の際発見されたもので，いわば竪穴群中第1号にあたる。

1辺約2.45m×2.5m ほどのいわば方形プランで，北壁の東側に約50cmの長さで，幅1mの出入口と思われる施設がある。

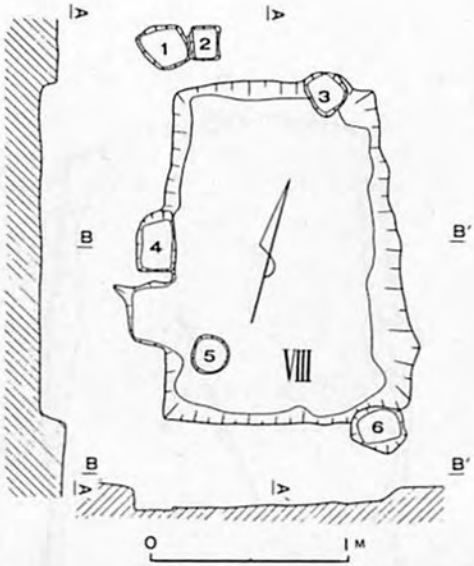


Fig10　第8号竪穴実測図

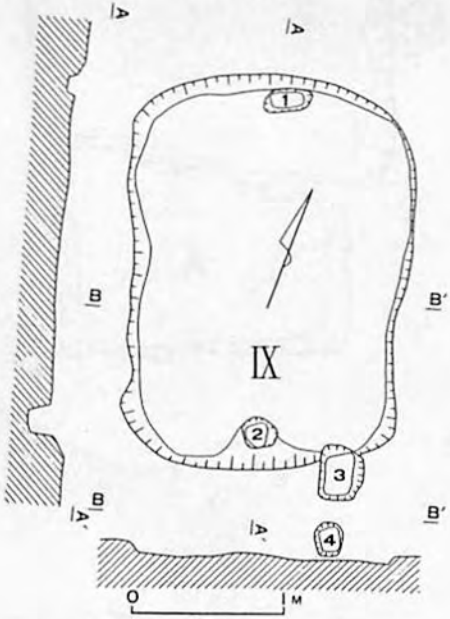


Fig11　第9号竪穴実測図

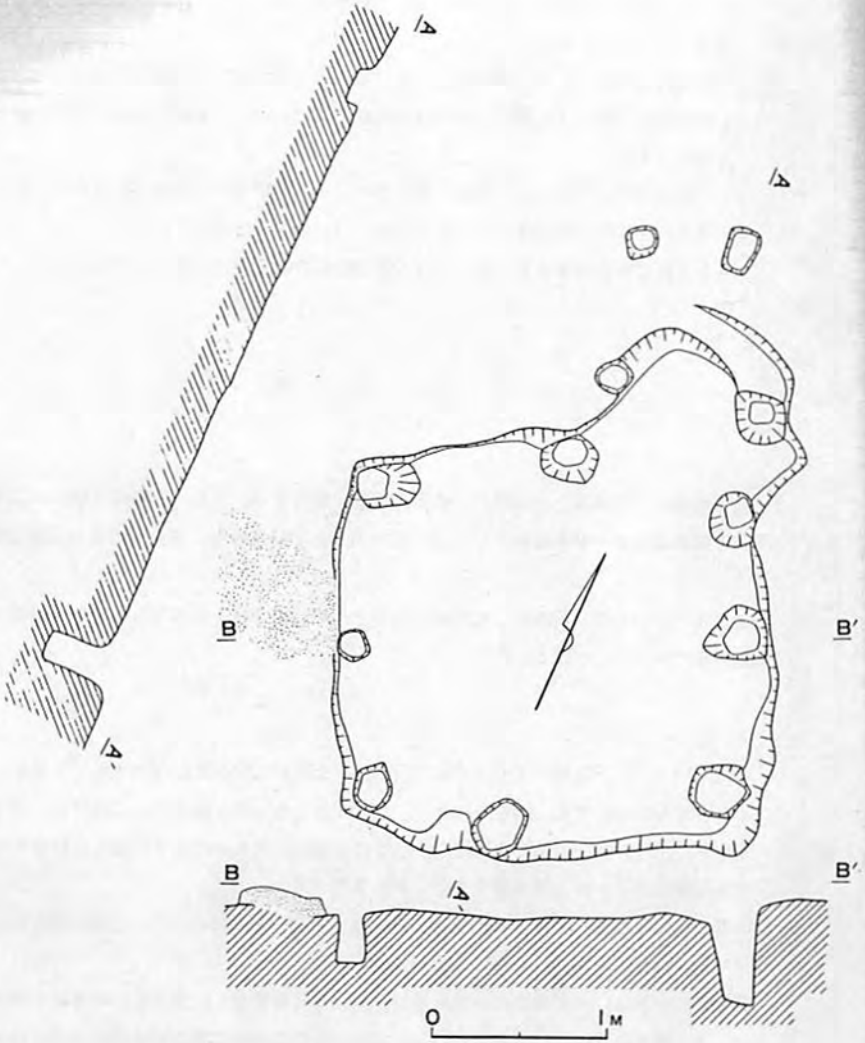


Fig12 第11号竪穴実測図

柱は竪穴周壁内に，四隅と四壁中央に各１本，計８本が検出され，出入口と思われる張出部の端の両側に２本ある。

柱穴はいずれも深く，１辺20～30cmの角柱に類する。

床面は平坦で，西壁の側に焼土と灰が見られた。竪穴はこの面を切って掘り下げられている。

発掘時，この竪穴の上に，北西の方向に並ぶ炭化萱があった。屋根材であろうが，炭化柱材は発見されなかった。

ピット群

Pit　A　〔Fig13，PL10〔2〕PL11〔1〕〕

発掘区の東南隅により，Pit B と並んで発見された。ピットはほゞ円型に掘られ，その短径1.5ｍ長径 1.8ｍ，長縁南側より南に向け，あたかも木器の片口状に，幅１ｍ先端の次第にすぼまり，ピットに向って傾斜する掘りこみがあり，第12号竪穴の西側床面を切っている。深さは 1.8ｍで底部は丸底状で開口部から底部にかけ，次第にすぼまる。柱穴が北周に２個ある。出土遺物は全くない。

Pit　B　〔Fig13，PL11〔1〕〕

上記 Pit A にほゞ並行に，片口状の掘込み部分は Aと反対に北を向き，ピットの開口部で長径1.6ｍ，短径 1.5ｍ，深さは２ｍである。

ピットの断面形は Pit A と同じである。柱穴はピット開口部の北西縁に１個ある。出土遺物なし。

Pit　C　〔発掘全体図〕

Pit A の北側わずか距てて，第１次の調査の際に発見された。長軸が東西方向を示す長隋円型で，長軸の長さ1.85ｍ，幅83cm，東半部のはピット状をなし，深さ60cmである。

充塡土の上面に，３個の扁平な河原石が並べられて発見された。出土遺物はない。

Pit　D　〔仝上〕

第９号竪穴の南，Pit B の北にある。西側にやゝ大きいが浅い不完型なくぼみがある。円型で直径60cm，深さは10cm。出土遺物はない。

Pit　E　〔仝上，PL11〔2〕〕

第11号竪穴の東南壁外側に近く。筒形で，直径50cm，深さ40cm。内部周壁に，桶状の縦の側板痕，ないし縦位の掘痕が顕著である。内容遺物はない。

Pit　F　〔Fig7，PL6〔1〕〕

第２号竪穴または第７号竪穴の付属施設と見られるもので，直径90cm，深さ80cm。円形開口部の周辺が，やゝ方型の広がりをみせる。内容遺物はない。

C 掘 立 柱 建 物

空濠の北側，北縁に接し，西南区に一部重複する２棟の掘立柱の木造建築物跡が発見された。

建 物 Ⅰ 〔Fig13 PL12〔1〕〕

桁行五間（柱間七尺），梁間四間（柱間七尺）である。

シラス面で検出された柱跡は，一辺30cm～40cmの角柱であることを示し，柱穴の深さは，シラス面から20cm～30cmであった。柱穴底に根石は見られない。

角柱列の特長は，桁行中央に位置する柱を欠くことである。

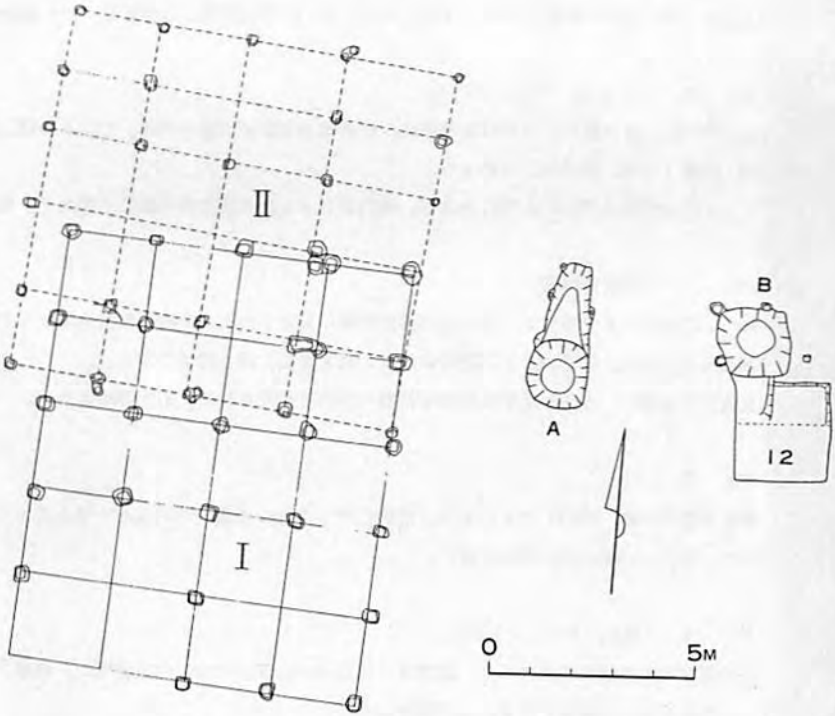


Fig13 建物Ⅰ・Ⅱ，ピットA，B第12号竪穴

建　物　Ⅱ　〔Fig13　PL12〔2〕〕

桁行五間（北から五尺・五尺・六尺・七尺・六尺）梁間四間（東から九尺・八尺・七尺・七尺）

シラス面に残る柱跡では，柱は角柱で，一辺20cm～50cmであり，シラス面から深さ20cm～30cmの深さを残し，根石はない。

第Ⅰの建物と同様に，桁行中央の北より２本目の柱の位置すべき点に柱穴は見当らない。

なお両建物跡とも，その西側の区域は未発掘であり，従って付属建物等の存在の有無は，目下のところ不明である。

またこれと接する周囲に，これに付属するピットなど明確なものは発見されていない。

出土遺物は柱列群の範囲内から小数の陶片，鉄釘などが出土している。

これらの掘立角柱のあるものは，一部の長方形竪穴の壁などを掘りこんでいた。

Ⅳ　出　土　遺　物

出土遺物は，陶磁器，木器破片，鉄器，銭貨，炭化穀物，土器，石器の８種に大別される。それぞれの個数はわずかであるが，いずれも当地方として初見のもので，おのおの貴重な意義をもっている。

この章では，土器，石器とこれ以外の遺物を，時代差を示すものとして２群に分離し，まず土器，石器からそれぞれについて記載する。

A　土　　器

Fig14〔1〕，PL13〔1〕～PL13〔2〕が土器の特徴あるもののすべてである。いずれも破片で，しかも小片であり，完形品はない。なお拓影のものの一部をPLに掲げた。Fig14〔1〕1－6，PL13〔1〕～〔3〕に掲げたすべての土器はいずれかの点で共通した特色をもっている。

まず口縁部でしかも山型突起をもつ２から説明する。

土器２は口縁と並行に，これと並行した貼付け微隆帯文をめぐらし，口縁上端と同じくその上に細かい刻み目文（擬縄文）を施こしている。

突起部の外側は，わずかにこぶ状を呈し，刻文ある隆帯から，間をおいた平行な微隆線文が縦に走り，その間を帯状の縄文で飾っている。この体部の微隆線文間の帯状縄文のある部分のほかは磨消しによる無文帯である。

色調は黄褐色，部分により黒色を呈し，胎土には微細な砂を少量混ぜ，焼成がよく硬い。厚さは６ｍｍである。

土器１は上記２と同様であるが，鋭い工具によって三角形の列点状刻文を，すり消し部分に施文

したものである。

右側は裏面の拓影であるが，成形時または施文時に偶然につけられた爪の型が見られる。

土器3は土器2と同一個体に属するものであろう。裏面に植物の種子圧痕がある〔PL 13〕

土器4は，土器2と同一個体らしい。

土器5は，胎土等まったく前記の土器と同じであるが，微隆線文を作るため使用した工具が他と異なる。また縄文が斜行縄文である。

土器6は，口縁部の内外両端縁と口縁に平行な隆帯文上に，細かい刻み目文が見られる。たゞ口縁前面と口縁下の刻み目文は，あまり顕著ではない。

この土器の内面には，横走する条痕がある。隆帯の断面は三角形で，もちろん貼付文である。胎土の状態は，上記の他の土器と同じである。

土器7と土器8の上端部は，外反または外傾する口縁に接続する部分に当るが，細い半截竹管を上下交互刺突文である。その下にはやゝ太い沈線による変形工字文，ないし菱形文が横位に施文され以下は7の場合，器表か剝落，8は欠失して不明であるが，7の矢印の線，剝落した面に，土器1，3に見られるものとは異なる，列点状刺突文の端部と思われる列点がある。胎土にはほとんど砂粒を含まず，軽いが焼成はやゝ良好である。灰褐色を呈し，厚さ7mm。

土器9は内面がよく磨研された土器で，厚さ5mm，器表の半分は剝落しているが，残った部分に，きわめて細いまばらな縄文がかすかに認められる。器表は黄褐色，裏面は黒色である。

土器10，11は土師器のような肌の土器であるが，器表に極めて細く浅い，X状の刻線が見られる土器である。11の胎土は土器5と同じであるが，10はやゝ粗く，ふたつとも焼成はやゝ良好。

土器12，13は明るい灰褐色の土器であるが，滑面でなく，きわめて細い縄文？があり，14は褐色であるが，器表には細い縄文？があり裏面にはごく浅いが整然とした櫛目状の擦痕がみられる。いずれも，胎土に細粒の砂をやゝ多く混在する。

土器15，16は，15が黄白色，17は灰黒色で著しく異るが，器表に浅い櫛目状の平行沈線を生ずるような工具を用いたと考えられる沈線と条痕が走り，胎土には細砂を混在し，焼成は良くない。二つの土器片は同一個体のものと考えられる。厚さ5～6mm。

17の土器も黄灰色を呈し，浅い葭管様の工具による二条の平行沈線が，口縁と竝行し，下方に細い横走沈線がみられる。拓影の左端で口縁が山形または波形をなすようにあがり，前面にふくれてくる。胎土其他は16などとは異る。また裏面にも，まばらな横位の擦痕がある。厚さは5mm。

18～20はまばらな斜行縄文の同一個体に属する土器片であるが，縄文の一部にすり消された部分もある。細片でよくわからないが，胎土には砂粒なく，焼成よく，硬い。黄褐色。

土器21は斜縄文をやゝ太い沈線で区切り，すり消しが施され，胴をめぐる水平の沈線がみられる。おそらく縄文部分も沈線にはさまれ，大きい渦状の文様帯を構成するものであろう。焼成よく，厚さ9mm。

22は口縁部の内側がかけているが，口縁やゝ外反。口縁部と体部の間に，撫消帯がみられる。胎土には細砂が混在し，焼成よく硬い。厚さ4mmである。

23は無文，ろくろを使用し，平滑な面をもち，器壁のうすい土師器であるが，底は糸切りである。

以上が出土土器のほとんどすべてである。若干の石器が出土しているが，包含層は確実でなく，遺構区域の黒土層に混在していただけである。

B 石　　器

Fig14〔1〕PL13〔2〕が出土した石器のすべてである。

図の1は幅が広いが，短かく，厚い打製のスクレーパーである。粘板岩製で，長さ約6.5cm，幅4cm，厚さ1.5cmほど。

2は図の左側下に，トリミングを施こしたスクレーパー。岩石は緑泥岩と思われる。

3は石鏃である。粘板岩製。

4は三角型の河原石であるが，たまたま，上部に等径の2個の穴が間をおいてあり，その中央から，刻線状の一線があり，あたかも人面状に見える。縦位の刻線は一部加工したものである。

他に第5号竪穴の北3mぐらいの地点に，黒曜石の剥片が1片出土した。

C 鉄　　器

Fig14〔2〕PL17，18は出土鉄器である。

1，2はともに小札ふうの鉄片で1は短辺6cm，長辺2.5cmの長方形で，厚さは3mmである。

2は長辺6cm，短辺2.5cmと1と同じ寸法である。厚さ2.5mm，一辺がすり減ったためかあるいは腐蝕によるか，わずかに弧を描く。やゝ弯曲している。

1は縁辺にちかく7個ずつの2列14個の小孔が並ぶ。2も同様の孔数をもつものと考えられる。

3は一辺に鋸歯状の突歯をもつもので，現長5.7cm，幅3.5cm（最大）で，厚さは3mmである。

4は先端に3個の小さい3突歯をもち，やゝ厚い。器部は長さ6cm，中茎6cm，全長12cmである。厚さは器部で1cm。径は次第に細くなる。

5は長さ6.5cm，幅1.5cm，厚さ0.5cmで，扁平で先端が次第に細まるクサビ状の鉄器である。

6は長さ6cm，幅1.2cm，厚さ0.5cmで，断面は長方形である。

D 陶　　器

口絵およびPL14～16は陶器および陶片である。口絵は第12号竪穴の炭化米や銭貨と共に出土した。口径32cm，高さ35cm，底径3.8cm，胴部径5.5cmの小型で，底部にきわめて細かい糸切痕がある陶器である。やゝ灰味を帯びた乳白色で，底部以外に釉がかけられ，美麗である。

2は瓶の小破片と思われ，淡青緑色を呈する。

3は口縁部の破片で，白い釉がかけられている。

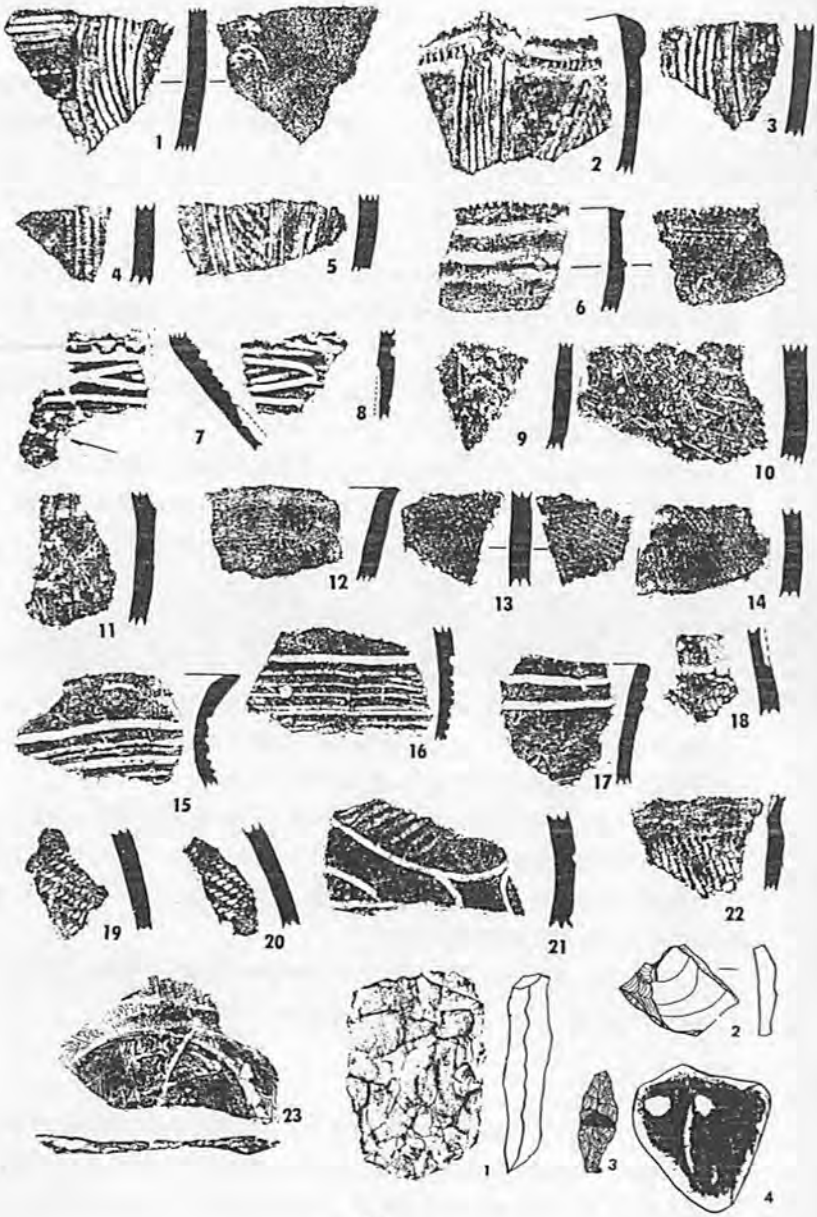


Fig14 (1) 出土土器拓影

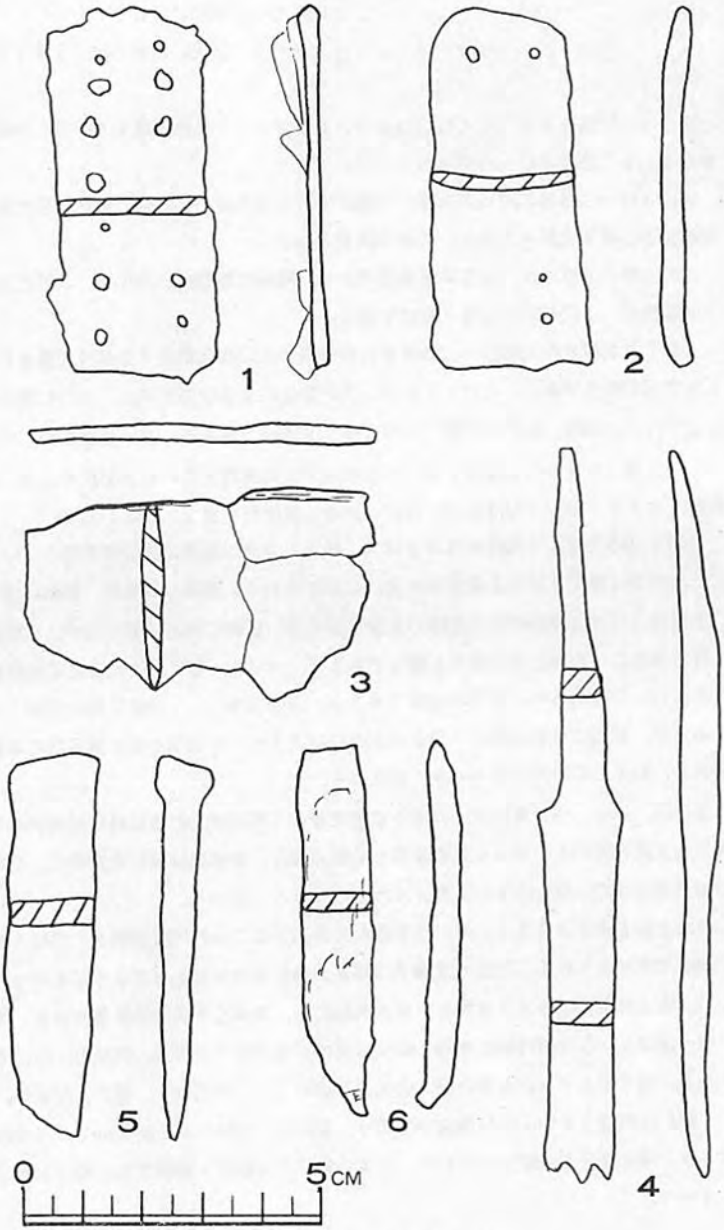


Fig14〔2〕 出土鉄器

4は白色の釉下にうすい文様の一部がみられる。

5は破片で民窯風である。

6は片口で，釉はほとんどなく，須恵器風の破片である。

7は新らしい時期のものと感じられ，8～11はともに紺色で文様が描かれている。

E　銭　　貨〔Fig14〔3〕PL18〕

3個の銭貨はともに第12号竪穴内にまとまって出土した。紹聖元宝，大観通宝および熙寧元宝(？)の各一枚である。

F　木　　器〔PL19上〕

第12号竪穴の出土である。炭化，破損が著るしいが，一部は炭化米に密着して出土したから，その容器であろう。

写真の上段左端とその下はくりぬきによる制作で，厚さ5mm。直径およそ 5.5cmである。他の木片もいずれも片面にくりぬきの刃痕を示している。

G　炭　化　米〔PL19下〕

第12号竪穴出土の炭化米である。いずれも写真のような固結した塊状で出土した。籾殻の残存は認められない。おそらく米または炊いた飯であろう。他に粟粒と思われるごく小量の穀粒らしい炭化物もみとめられた。この炭化米は上述のとおり，容器に収納されていたもののようである。

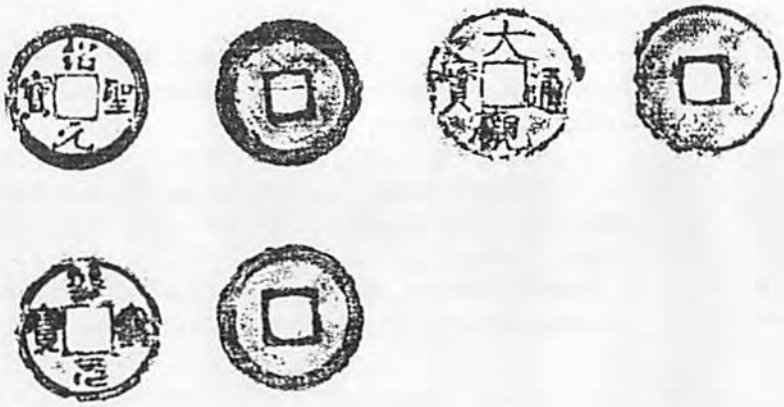


Fig14〔3〕　銭貨拓影

V 考　　察

A 出土遺物について

1 土器と石器

出土土器の数量が少なかったのは，遺構で明らかにした掘立柱の建物のための地ならしや，戦時中の開拓等によるものと思われるが，理由はこればかりではないかもしれない。この事については後述する。ここではまず土器と石器について考察する。

Fig14〔1〕の1～6は後北式土器[1]，別称江別式土器であり，後北 C_2 式（江別Ⅲb式）土器である。但し5は北大式である疑いもある。

7，8は欠失した口縁部直下のくびれた部分に，特長的な交互刺突文が施文されている。交互刺突文は，外径4mmぐらいの細竹管で上下交互に刺突して，浮文状の文様を作り出したもので，以下はやゝ太い丸棒状の工具で，菱形文的な沈線文様を画いたものである。この沈線文以下は欠失して不明であるが，7の表面剝理した部分に，拓影の矢印の個所に見られるように，3点の列点の刺突文の底が残されている。

交互刺突文は，小坂地方で明らかにされた，天王山式系統の土器[2]の特色である。片山館コの出土破片は，縄文の部分が欠失していて不明であるが，沈線文下に残された刺突文の痕跡は当地方初見のものであり，また交互刺突文でありながら，地文に天王山式とは少しちがう特殊な縄文をもつ土器か北秋田郡下で発見されている[3]ことから，地点によって，交互刺突文の消える時期は，大館・鷹巣地方では小坂地方よりも遅れるかもしれない。

また剝落部分の列点文が，交互刺突文でなく，後北式の列点状刻点文に類するとしても，地方的に存続した天王山式系の土器が，後北C期に接触する可能性はまずないと言える。その意味でこの土器は，なかなか興味深い。

9－14の土器群は，口縁部片がなく不明であるが，縄文ある9は，天王山式の最末期ごろに位置し，10～14は不確実であるが北大式の疑いがある。

15，16は擦文式土器の初期段階の土器と考えられる。18～20は北大式の疑いがある。17，21は縄文後期のはじめ頃と思われる。22は続縄文期らしく，23は言うまでもなく土師器の坏の底部である。

そして以上の土器のうち，長方型または方型の小型竪穴遺構の大部分と関連すると思われる後北式（江別式）土器について略記する必要があろう。

江別式土器は北秋田郡内では発掘によるものとしては，市内福館[4]について第2番目であるが，福館ではわずか1片にすぎなかったが，ここでは少なくとも4個体分出土した。

秋田県北部では，鹿角郡小坂町曙岱[5]で，安保彰氏によって表採されたのがはじめてで，その後，同大谷地砂取場[6]で，出土層位が明らかにされた。

小坂では火砕流台地の全面を，大湯浮石層がおゝい，大谷地では後北 C_2 式土器は，この火山灰下

の浅いところに出土する。

小坂でも後北式土器と，他の土器の共伴例は未確認であるが，火山灰下8cmぐらいのうすい層に，小坂X式土器→天王式系土器と累層し，後北式土器は，この天王山式系土器や他の同時代の続縄文式土器の包含層よりは上層位で，或いは小坂X式のある時期（ほゞ3期ある）と同時代と推定されている。

後北式土器は，いうまでもなく北海道にその分布の中心をおく土器で，A，B，C_1，C_2，D_1，D_2，E（北大式）に細分されているが，北海道の続縄文時代の後半に編年されると考えられ，奥羽地方北部（考古学では，北部とは岩手・山形両県以北を指す）にも分布している。[7] その分布は薄く，下北半島，岩手県北部から中部と点々と散在し，北大式がやゝまとまって宮城県北部の一迫町に発見されている。[8] B式と同期に比定されるものが小坂，[9] 他は下北と一迫の北大式を除いては C_2 式がほとんどである。[10] この発見度の稀薄さは北海道でも同じである。

この土器が，奥羽地方北半部に分布する事情については，奥羽地方の蝦夷期の歴史と密接な関係にあることで，重大な問題であるにもかゝわらず，発掘例の僅少なことから，実証的な定説とも言える論証は立てられないが，現在最も正当な見解としてわれわれが支持するものは，山内清男博士の書かれた次の文章である。[11]

「「続縄文式期は二期に分かれ，第一期は内地の弥生式と並行し，第二期は古墳時代に相当する。このあと奈良朝あたりに相当する時期に，擦文式土器という特有の土器が北海道全土に分布し，……ところで「続縄文式」の第2期は二，三の段階に分かれて，江別式土器が古く，次に北大式と言われるもの，そのあと内地の土師器ふうの土器（擦文式土器等）の仲間がくるらしい。

この江別式土器は，ほゞそのまゝの形態，装飾で青森県，岩手県北部に発見される。これより南の岩手県南部，宮城，山形などには破片となって，古墳時代の土師器とともに出土する。北大式土器の一部は，宮城県栗原郡などで土師器にまざって発見されている。まえに「続縄文式」第一期の北海道的特徴を備えたものが，一部東北，北陸の弥生式にはいりこんだと述べたが，こんどは，第二期江別式では，東北部を占居して，その南では古墳時代の土師器の古い部分（筆者が塩釜港で採集したものを標式とする）とふれあい，その状態が古墳時代中期以後までつづくものと考えられる。

内地北端の江別式は，北海道とともに，おそらくはアイヌ文化勢力の領地であり，北進しつつあった古墳文化の最古，最北の勢力とむきあっていた。また山形，宮城の例にみるような江別式土器片の混入は，アイヌ文化の一端が南下したことをものがたる。江別式をアイヌとすることには異論もあろう。しかし五世期前後における日本民族論は，最近の考古学の成果もとりいれて，かって論議されたよりははるかに明確に，地域や時代について語り得るようになっている」（後略）

伊東信雄教授は昭和46年1月，東北大学での最終講義[12]に於て，蝦夷の人種について教授としてはじめての重要な発言をされた。いま教授の講義から引用すれば，

「（前略）私はこれまでしばしば蝦夷の問題を論じて来たが，つねに文化の問題に限定して人種の問題を論じたことはなかった。……ここで私ははじめて蝦夷をアイヌ系の人種と規定したの

であるが……』

教授はこの発言の前提として『東北の縄文時代人が使用した言語はアイヌ語系のもの』とされ，宮城県の江合川流域から，山形県の最上川流域を結ぶ線の以南と以北の５世期頃の文化に落差があることを指摘し，以北における後北式土器の出土と，残存する多くのアイヌ語地名の存在と，マタギ用語にあるアイヌ語単語などをその証拠としてあげられたのであった。

ここで，後北式（別称江別式）土器が使用された時代は，東北南部の古墳期の最古の時代とほゞその終末を等しくすると考えられているが，人種問題，すなわち，後北人をもってアイヌの祖そのものとするか否かは，形質人類学上の難問であった。

この10年ほどの間に，北海道においては，アイヌについての自然，文化両人類学からの追求が急速に進展した。

まず北端の宗谷岬のオンコロマナイ遺跡出土の人骨[13]は，後北式土器に伴なうのではないかと思われるもので，それは当時札幌医大でこの人骨を計測報告した山口　敏氏によれば[14]江別坊主山で河野広道氏が発掘した北大式土器に伴う墳墓出土の人骨と全く酷似したものであって人類学的にはオンコロマナイ人のグループに属した。しかもそれらは近世北海道東北部のアイヌと共通する点が多く認められることが明らかになった。

道北ではこの次期にはオホーツク文化人が広く異質の文化を持ちこみ，擦文文化人と混血したようであるが，道南では後北期の前，縄文晩期の亀ケ岡式系の土器文化人と，後続の続縄文期の恵山文化人の人骨には，抜歯などの特徴をもち本州的な骨格特徴が認められ，これが少しずつ変化して近世道南アイヌにつながるもののように見える。[15]

一口にアイヌと言っても，その文化的，自然的人類学上の問題は非常に複雑なのである。特に，これがエゾ問題どのつながりは，エゾの人骨の未発見と，同期の北海道擦文人の人骨の未発見という状況下では，確実な形質人類学的証拠を提示することができない。

ともかくも，舘コ遺跡に残された遺物を使用した人々の血は，それがはじめて〝北海道的〟な文化的，人種的要素を内地北部にもたらしたものではないことは，現在の考古学的な見解として原則的に動かない。

舘コに於て発見されている上質の糸切底をもつ土師器は，後北Ｃ２式土器を床面から出土した第５号竪穴の，掘り込み面と同レベルの充墳土層からの出土であり，それはFig14〔１〕の15，16の土器と層位的にほゞ同期である。

さてこの後北式（江別式）土器は，昭和26年　全28年に，これまで層位別に発掘されたことのなかった，各期の後北式土器と多くの象徴的な刻線画が発見された，北海道余市町のフゴッペ洞窟の各層から出土した炭質物の放射性炭素による測定年代によれば，1920±130　Ｂ・Ｐ（下層）～1870±100　Ｂ・Ｐ（中層）を示しているのである。[16]

即ち後北式の編年的な年代位置は，放射性炭素による年代では，現在（昭和48年，1973年）から，ほゞ1944年±115年前ぐらいとなるであろうか。１世紀の100年　前後ということになる。ここでもや

はり，放射性炭素による年代は，少しく古い年代を示しがちな傾向をみせる[17]事実は否定できない。

実際はその開始と終末は，4～5世紀に降るとみるべきであろう。

石器は層位的に確実なものはない。Fig 14〔1〕の1は，形態上，宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡から[18]発見された北大式土器片に共伴する石器の中に類似品がある。

黒曜石の剝片が出土しているが，これも後北式の石器の材料として普通のものである。

2　鉄器について

1，2はともに鎧の部分，敢て推定すれば桂甲小札であろうと考えられる。

3は鋸の折損したものと考えられる。鋸とすれば歯の配列から縦ひきであろと推定される。

4は先端部は現代の鼠歯錐に似ているが，鉄鏃とも考えられる。出土先例がないので詳細は不明である。

5は「クサビ」または船釘様である。6は刀子状であるが刃部がなく，5と似たものであろうか。

3　陶器について

出土陶器については東京国立博物館東洋美術室長長谷部楽爾氏，秋田県博物館準備局奈良修介氏，秋田県文化財専門委員小野正人氏に教示を得たもので，三氏の御鑑定は必らずしも一致しないがここではそのまゝ記録に止めることを御許し願いたい。

1は薬壺であろうと思われるが，長谷部氏は13世紀鎌倉時代の作品と考えられ，小野氏は古瀬戸の末期の作品に属し，戦国時代，さかのぼっても東山期と観られる。

また奈良氏は，本県男鹿市脇本埋没家屋から類似の陶片が出土していることを指摘された。美濃長田窯の製品で，古くみて11世紀，この種のものとしては現在北限であろうと教示された。

2は瓶の小破片で，長谷部氏は12～13世紀の龍泉窯の青磁ではないかとみられている。

3の口縁部破片は長谷部氏によれば12～13世紀，民窯で焼かれた作品で，白磁に近いものかとみられる。

小野氏は生地白といわれるもので，ピンホールの存在を指摘され元よりの到来とみられる。

4は染付であろう。長谷部氏によれば江戸期の作品とみられる。

小野氏によれば李朝の磁器であろうとされる。

5は小野氏によればカメの破片で，いわゆるナマコであり，白岩焼様とされる。

6はわれわれの考えでは，須恵器の系列をひく洲珠焼であろうと推定する。

7は蓋で，長谷部氏によれば江戸期のものであろうとされる。

陶片の存在は，単に文化内容を示すには止まらず，広く日本海域の交易の様相を示す。同時に，これを使用した人が仮りに豪族であったとすれば，その豪族の性格，またその所属する勢力圏をも示している。いまこれらの重大問題を論ずるには，なお資料として不足である。今後の発掘で新資料の発見を期待するものである。

また当然これら歴史期の遺物は，その重層する時代の時期推定にとって重要な資料たり得ることもいうまでもない。

4　銭貨について

銭貨のうち紹聖元宝は青森県油川で45枚，仝藤崎で130枚，岩手県猪村で 25枚出土している。

大観通宝は油川で７枚，藤崎で21枚，猪村で10枚出土例があり，熙寧元宝は藤崎で 268枚出土している。

なお鋳造年代は次のとおりである。

熙寧元宝　1068　　（北宋・神宗）

紹聖元宝　1094～1097（北宋・哲宗）

大観通宝　1107　　（宋・徽宗）

〔註〕

〈1〉a　名取武光　「北海道の土器」人類学先史学講座・第10巻・昭14・7

b　河野広道　「網走町史先史時代史」網走町史・昭33・3

c　河野広道　「北海道の土器」・郷土の科学・23号・昭34・7

d　河野広道　「斜里町史先史時代史」斜里町史・昭36・6

e　名取武光編「フゴッペ洞窟」昭・45・6（単）ニュー・サイエンス社

〈2〉a　安保　彰　「秋田県小坂町出土の続縄文式土器について」東北考古学・2・昭36

b　奥山　潤・安保　彰　「十和田湖西南部の弥生式文化とその後続形態」(上)・(下)考古学雑誌 49巻2・3号 昭38・11・12

〈3〉　大和久　震平　「弥生文化・続縄文文化」秋田県史　考古編　pp 156，36図・昭35・3

〈4〉　近刊の本調査資料第７集に報告

〈5〉　前掲〈2〉a

〈6〉　前掲〈2〉b

〈7〉　奥山　潤　「奥羽地方の後北式土器」北海道人類学通信・9・昭40

〈8〉　佐藤信行　「岩手県岩出山町木戸脇裏遺跡」考古学雑誌・第53巻第4号・昭43・3

〈9〉　奥山　潤・安保　彰「奥羽地方の帯状文土器及後北B式併行土器」北海道考古学　第3集・昭41

奥山　潤・安保　彰「小坂X1式土器及後北B式併行土器」考古学雑誌・第5巻・第4号・昭41・3

〈10〉　江坂輝弥　「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方の文化交流の研究」民族学研究・第26巻第1号　1961

江坂輝弥・高山　純・渡辺　誠「青森県九戸泊岩蔭遺跡調査報告」石器時代・第7号・昭40・10

〈11〉　山内清男　「アイヌの内地出現」縄文文化の社会　昭・44・10「日本と世界の歴史」第1巻 古代：〈日本〉先史－5世期　pp97

〈12〉　伊東信雄　「東北古代文化の研究」－私の考古学研究・文化第35巻第12号・昭46

〈13〉　山口　敏　「宗谷岬オンコロマナイ貝塚出土人骨」人類学雑誌70・1960

〈14〉　山口　敏　「江別市対雁坊主山遺跡出土人骨」人類学雑誌71・1963

〈15〉　藤本英夫　「アイヌの墓」単・サンケイ新書「北の墓」単・学生社

〈16〉　前掲（1）e

〈17〉　たとえば　佐原　真「14C年代所感」考古学と自然科学・第5号・1972

〈18〉　前掲（8）

B　遺構について

1　竪穴群について

今次発掘まで12の小竪穴を発掘したのであるが，これら竪穴はその平面プランの点でも出土遺物の上からも，類別して考察することが妥当であろう。それらの中には，類別するには余りに特徴が少なく，ほとんど確実性を欠く区分しかできぬものがあるが，ここではとりあえず次のように分類したい。

第1類竪穴

第1号竪穴～第7号竪穴，第9号，第10号竪穴

第2類竪穴

第11号竪穴，第8号竪穴

第3類竪穴

第12号竪穴

第1類竪穴群は，長方型竪穴を主体とするもので，著るしい特色は，第2号竪穴の他は，その長軸の方向が同じことである。

今次発掘では，第8号竪穴と第7号竪穴の線以西，第6号竪穴と第12号竪穴以南，第9号竪穴以東は発掘していない。それ故に断定はむずかしいが，長方型竪穴には，それぞれ小型のやゝ方型の竪穴が付属しているようにみえる。即ち第11号竪穴＋第4号竪穴，第5号竪穴＋第6号竪穴（？），第7号竪穴＋第10号竪穴，第3号竪穴＋第8号竪穴といった具合である。

だがもし第2号竪穴の方向が東西長軸な点を固執すれば，第2号竪穴，第10号竪穴，第4号竪穴を，南北軸の群と分離できるかもしれないが，この様に群別するならば，むしろ第8，3，10，7，2号の各竪穴を1群とし，第5，6，1，4号竪穴を他の1群とする方が妥当のように考えられる。

なぜならば，見方によっては，これら2群の竪穴の配置は，各竪穴が独立任意に掘られたものでなく，或る基準にもとづいて〝配置〟されたとも思われるからである。

これら竪穴には各竪穴とも室内で火気を使用した形跡はないが，L字型に竝んだ竪穴群に関連あるように考えられる屋外炉が，第5号竪穴と第11号竪穴を結ぶ一線上に見られることなどから，もしこの竪穴　―屋外炉の結びつきが正しいとすれば，前記の竪穴の配列関係に何らかの意味を与えることが全く無価値に終らないであろう。

長方型の竪穴の発掘は，現在までのところ，北海道一奥羽地方を通じて先例はないようである。

竪穴内に遺物の出土が少ないので遺物と竪穴を結びつけることは甚だ危なげであるが，第1号，第5号竪穴床面から後北C_2式土器が発見されているのが最も信頼のおける出土状況であることから，これら竪穴は，後北人の生活址であろうと推定される。第3号竪穴なども，天王山式系の土器片1個を得たが，やはり後北人の竪穴であろう。後北人の竪穴としても，北海道の未発見のこの期竪穴が，皆この様な形態であるかどうかは勿論断定できない。

第7号，第8号竪穴のうちのどれかは，或いは初期擦文人の竪穴かもしれない。しかし後北人の竪穴は，そのA，B類あたりの竪穴が北海道でわずかに確かめられているだけで，これは円形竪穴であるが，後北$C_{1,2}$（江別Ⅲ a，b）の竪穴は北海道南部でも発掘例がないので比較できない。将来，他地方での発見をまって対比できる日の近いことを期待している。

もしこれが後北人の竪穴であるとして，また後北人がアイヌの祖系人種であるとして，しかも近世アイヌのように，pon－chiseとporo－chiseの間を夏，冬季にわけて移住する習性を彼等がもっていたとするならば，ここは冬の家ではなく，寒気のきびしくない時期の住居であったろうと想像される。

また，無文でかすかに擦痕ある土器が出土していることから，天王山式土器が行われた末期から小坂X式期にかけてか，小坂X式末期から後北C_2期にかけてかのいずれかに該当するかもしれない。いずれにせよエゾ発生期の寸前か初期の文化に属しているらしい。

第2類竪穴とした第11号竪穴は，深い柱穴をもっていて，しかもその柱は角柱に類する。この竪穴は西側にある焼土（屋外炉）を切って掘られているので，これより以後，即ち長方型竪穴群以降であろう。

この竪穴で不可解なことは，柱の数がせまい方型竪穴の内壁にそい8本もあり，しかもかなりしっかりした柱を建てたであろうことはその柱穴の深さから容易に推察できる。

この事実から，この柱列には高床の倉庫風の上屋があったと解することもできたかもしれない。その場合，何故に柱列がせまく浅い竪穴の中にあるのかが疑点となる。この竪穴が北東隅に張り出した出入口があることは見逃すことはできない。これらの互いに異和的条件を全部採用すると，この竪穴の柱は，倉庫風の建物を支えていたもので，その倉庫係は床下の竪穴に住んでいたことになる。また或いは槽であろうか。

第8号竪穴の柱もまた角柱である。

第3類とした第12号竪穴は周囲を全掘していないので不明な点が多いが，完形の薬壺らしい陶器と銭貨を出土し，炭化した米（或いは飯）や粟粒を出土し，しかもそれが木器中に納められていたことなどから，特殊な収納庫ふうのもののように考えられる。

2　ピット群について

ピットA，Bという実に異形のピットの出現は調査者を中ば呆れさせた。内容物は炭質物が埋土に混っているだけで皆無である。

たゞこれが各々片口状の緩斜する溝状施設をもち，さらにA，B 両ピットのそれが全く反対方向であることと，A には円形の主体部周縁に4本の柱をもっていることから，これらが掘立角柱の第Ⅰ，第Ⅱ建物のそれぞれの付属施設であったろうと考えたくなる。

用途は不明であるが，調査員の中では〝便所〟でないかとの卑見が強かった。

3　掘立柱建物について

掘立柱建物の考察にあたって，重複するが，いま一度その規模等を再掲すると，建物Ⅰ・建物Ⅱとも礎石を用いず，直接土中に柱を埋める角柱掘立柱建物で，柱穴内に根石はみられない。

建物Ⅰは桁行5間，梁間4間で，桁行35尺（7尺等間），梁間28尺（7尺等間）を測り，建物Ⅱは桁行5間，梁間4間で，桁行29尺（北より5尺・5尺・6尺・7尺・6尺），梁間31尺（東より9尺・8尺・7尺・7尺）を測る。

建物Ⅱにおいて，東西に棟をとる，桁行4間（9尺・8尺・7尺・7尺），梁間3間（6尺・7尺・6尺）の身舎に，北側に庇2間（5尺・5尺）張り出した建物も想定してみたが，建物Ⅰと共通する桁行中央柱列北第2柱がぬけているところに重点をおいて，仮に南北に棟を置く建物を想定した。

使用柱は柱穴底部に残された柱根痕より，建物Ⅰで最大のものは一辺35cm，平均的なものは一辺20～25cm，建物Ⅱでは最大のものは一辺25cm，最小のものが一辺10cm，平均的なものは一辺15～20cmと，建物Ⅰの方が太い柱を使用しており，柱間も整然とした建物である。

新旧関係については，建物Ⅰの東側桁行柱列北第1，第2柱が，建物Ⅱの東側桁行柱列北第4，第5柱と重複し，建物Ⅰの柱穴が建物Ⅱの柱穴を破壊しており，このことより建物Ⅱが，建物Ⅰに先行する建物であろうと思われる。しかしその新旧差は長期にわたるものではなく，建物Ⅱが建造され短期間後に建物Ⅰが建直されたものであろう。

建物Ⅰにおいて，柱穴の規模，使用柱は，ほぼ同程度のものであり，建物の壁と立つ外縁の柱と同様，建物内部にある9本の柱も，床下束柱としてではなく，建物床上にまで延びて梁，あるいは桁を支える柱であるとみてよいと思われる。

そう考えると前述した桁行中央北第2柱がぬけていることには，何か意図的なものが感じられる。それは構築上のためではなく二次的理由によるものであろう。そこで「南面して何らかをおく，あるいは坐す前面の柱をぬいた」と仮定してみた。この南面しておく，あるいは坐す前面の柱をぬいたという仮定を重視して，建物Ⅱも南北に棟を置く建物とみたわけである。しかし，それならば，建物内容の柱をすべて床下束柱にすることにより，その意図はもっと有意義に達成されるとも考えられる。

事実，北秋田郡鷹巣町「くるみ館」[1]の例では，梁を壁上部桁行木よりわたして，そこに小屋束をたてて棟をわたした復原をしている。そこでは建物内部床上に柱がまったく存在しないわけである。

仮に建物内部に柱を置かないとすれば，今回検出された柱穴はあまりに堅固なものとなり，床下

束柱としては念入りなものとなり，桁行中央北第２柱だけ土中に埋めず，他の柱は土中に埋めたということになる。

そのように考えられないので建物内部の柱は床をつきぬけて，梁，あるいは桁をささえ，桁行中央北第２柱は，「南面しておく，あるいは坐す何物かの直前の柱をぬいた」と考えたのである。

建物内部の柱跡は，桁行，梁間ときわめて正確に位置している点も，柱が桁，あるいは梁と直接結びつくからであり，床下束柱であるならば，これほど正確さは要求されないであろう。柱跡が桁，梁と正確に交わるのも，この理由からとみたい。このことは建物Ⅱについてもいえることであると思うが，建物Ⅱはその方向が確定し得えないので，ここでは建物Ⅰについてだけ考察してみた。

建物Ⅰの梁間北より第五柱列，東より第３，第４柱がぬけていることに関して，火の使用痕や作業場的遺構はみられないが，土間であったと推定される。そうであるとすれば，梁間北より第４柱列までの３間×４間までは床板が張られ，第４柱列から第六柱列までの２間×４間が土間となる建物を想定できる。

別に，建物北梁間３間目を，東西に通ずる通路にして，通路北側は，中央に２間×２間，その東西両脇に１間×２間の室を，通路南側には，桁行中央北第４・５・６柱によって，間仕切する２間×２間の室を２室想定することもできよう。そうすると，ぬけている柱穴の上部は室になり，室内に上屋をささえるための柱を通さなかったとすれば，検出された柱穴を比較的明快に理解することができるかもしれない。

屋根については，建物Ⅰは東，西どちらかに正面を向く切妻の家であろうと思われ，建物Ⅱは軸が東西か南北かが決定し得ないが，やはり切妻の家であろうと思われる。屋根に葺かれたものは，瓦の出土がまったくみられないので，杉皮板葺等と考えられる。

建物Ⅰの七尺間取りの整然とした建物と，Ⅱの間尺のまちまちな建物の新旧関係は，ⅡがⅠに先行することを前述したが，近隣において，この時期の発掘例はなく，比較資料も乏しい。本遺跡とほぼ同時代と思われる比内町「真舘」[2]遺跡における掘立柱建物遺構は，1.9m，約６尺３寸間取りであり，鎌倉期と想定された「矢立廃寺」[3]跡は，礎石を用いた９尺間取りが主であった。平安中期～後期の「くるみ館」[4]の建物は，板校倉造り，柱穴構造と，本遺跡と構造は異なるが，柱立構造であるＢⅠ建物は，桁行３間（８尺等間），梁行２間（９尺等間）である。時代も異なり，間尺もまちまちであるが，建物Ⅰのような等間の建物はみられる。しかし建物Ⅱのような間尺の著しく異なる建物はみられず，それもたいして建物Ⅰとは隔たらない時代　―館が存在する時代―　であり，これからの「舘」調査における課題であろう。

建物の位置については，北郭南側中央部にあり，正面が東，西いずれになってもよい位置にあるため，これからの調査により確認していかなければならないが，その規模と構造より，館においてかなり重要な建物であったろうことは想像に難くない。特に桁行中央北第二柱がぬけている点より想定した「南面しておく，あるいは坐す何物かの直前となる柱をぬいた」とみることができるならば，この建物は舘の主要建物であったとみることができよう。これ以後の発掘調査で，北郭部への

通路，門跡，倉庫跡，厩等があれば，その確認が必要であり，その調査を行うことにより，当地方中世土豪（農従性の強いと思われる）の存在を検討するうえで重要な示唆を与えるであろう。

〔註〕

（1） 「胡桃館埋没建物遺跡第２次発掘調査概報」秋田県文化財調査報告書第19集　昭44・3　秋田県教委

（2） 奥山　潤・富樫泰時　「真館緊急調査報告書」　昭48・2

（3） 「矢立廃寺」　1964，11，20　花矢町社会科教育研究会

（4） 前　掲（1）

4　館コ構造について

平坦な段丘の舌状突出地形の基部を，現在低湿帯である凹地（或いは濠）で切断し，その内側に三重の土塁を築き，中央部をやゝ幅の広い空濠で区切り，南北二部の郭というべき主体部を形成し，東西両斜面に，段丘中位面，または切削による中段を備えたこの遺構は，明らかに砦址またはチャシである。館コという通称は，遺構内の最後の遺物や建物跡と関連する名称であろう。

その構造も，現況はこの最後の時代構築を物語っているように推定される。しかしながら，出土遺物から考察すれば，擦文土器初期の土器が出土していることから，既にこの時期に砦，すなわちチャシが築かれていたと考えることを妨げる理由はない。

東北地方北部，特に青森市付近では，擦文土器を主体とする土器群を出土する竪穴群が発見されている遺跡はチャシであり，「館」と現在呼ばれているものが多い。

たとえばごく最近調査された青森県東津軽郡蓬田村の「小館」[1]がそれである。

後北人が，東北地方の前期続縄文人の血の中に，再び北方的な要素を加えた時期に，はたしてチャシがあったかどうかは，今のところ明らかでない。これは近代アイヌのチャシについての見解であるが，更科源蔵氏[2]によれば，チャシは野獣の襲撃から身を守るためのものでもあったと考えられ，またこの遺跡の直前に当ると考えられる時期に，同じ米代川の河口附近で大和久震平氏によって調査された金山チャシ[3]がある。

時代が降って桃山時代に至り，鹿角市小技指の七ツ館[4]には指（サシ）の名が残っている。おそらく「館」と呼ばれるようになったのは，この時代をさかのぼらない。

サシは即ちチャシであり，アイヌ語である。このアイヌ語は，知里真志保博士によれば朝鮮語の古語であるサシ，またはチャシと関連する。アムール河々口に近いあたりで，アイヌ語にとり入れられたものであろうか。したがってそれは，シベリアからウラルを越えた地域に及ぶ文化圏に包含されるものとして考えるのを妥当とする。

もしこの舘コが，出土した江別式（後北式）土器や擦文土器と関連しているならば，チャシ状遺構としては，金山チャシに次ぐもので，この地方としては古期にはじまった砦に類するものと言えよう。

勿論，金山チャシと片山の舘コは異るものがあるし，また道南の「館」は，奥羽北半部のそれと近似のものがほとんどすべてで，近世アイヌのチャシ風のものは少ない。このことも中々複雑な問題を含んでいるようである。

今後中段，空濠，土塁について発掘が進めば，この砦自身の歴史が明らかとなるであろう。掘立柱建物との関連性は，この発掘によってのみ確かめることができる。

〔註〕

〈1〉 a桜井　清彦　「速報　青森県小館の調査」考古学ジャーナル・No.62・1971

b桜井　清彦・北林八洲晴　「青森市内の擦文式土器について」北奥古代文化・第2号・昭44・4

〈2〉 私信による

〈3〉 大和久震平　「能代市金山チャシ発掘報告」・鷹巣農林高校報告・昭32

〈3〉 江上　波夫　「館址」　東京大学東洋文化研究所

〈5〉 河野　広道　「網走市史先史時代編・第7節チャシコツ」網走市史・昭33・3

Ⅵ　総　　括

第1次片山舘コの発掘においては，秋田県北部地方でも比較的単純な構造をした，いわゆる「舘」または「チャシ」状の遺構内の一部で，現在までに報告例のない小型の長方形ピット群，方型ピット群が発見され，その一部には，後北C_2式土器片や初期擦文式土器，未知の鉄器などを出土した。これら竪穴群のうち一部は，その構造や出土品から，他と時代を距てたものもあり，宋銭，陶器，炭化米，木器などを出土し，発掘地区内の一部で発見された角柱掘立柱列の建築物との関連も考えられる。

これら時代の異なる重層した遺物は，遺物そのものが本県においても初見のものが多く，また竪穴や掘立柱建物との関連性においても，速断を許さぬものがある。

一般に，後北C_2—北大式期，土師—擦文式土器期，鎌倉—室町期，中世末期ないし江戸初期の4—5期にわたってこの舘コは使用されたことになる。その各時代文化の濃度については，今後の調査にまたねばならない。

謝　　辞

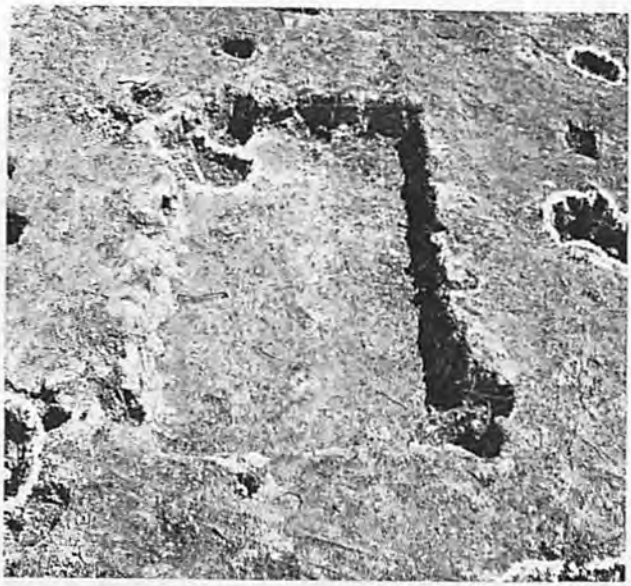
末文で失礼ながら，本調査を実施するに当って，特に寛大な承諾と御理解を賜わった，地主の片山在住谷地田　弘氏，発掘員の県立大館鳳鳴高校社会部員，仝桂高校社会部員，仝大館工業高校社会部の諸君，学術的に種々の教示を賜わった国立東京博物館長谷部楽爾氏，県博物館準備室奈良修介，県文化財専委小野正人の両氏，国立科学博物館山口　敏氏，札幌大学石附喜三男助教授，国士館大学大川　清教授，写真の国士館大学大門直樹氏，大館市の越前貞一氏，比内町前助役・建築家渡辺直治氏に，また常に親切な助言を惜しまれない畏友藤本英夫氏に厚く御礼を申し上げたい。

PL 3 〔1〕 館コ遠景 東より

PL 3 〔2〕 空 濠 東より

PL 4 〔1〕 第1，4，5，6号竪穴 西より

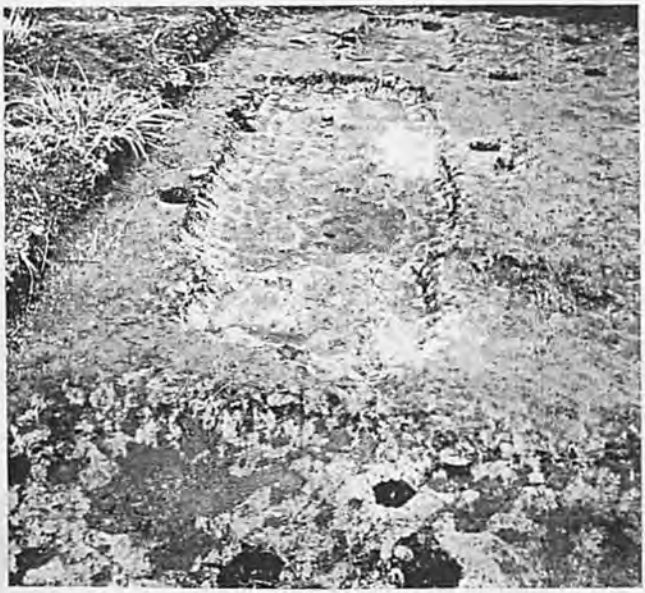
PL 4 〔2〕 第1，4号竪穴 北より



PL 5　第1号竪穴　北より

PL 6〔1〕　第2，3，7，10号竪穴とピットF　南より

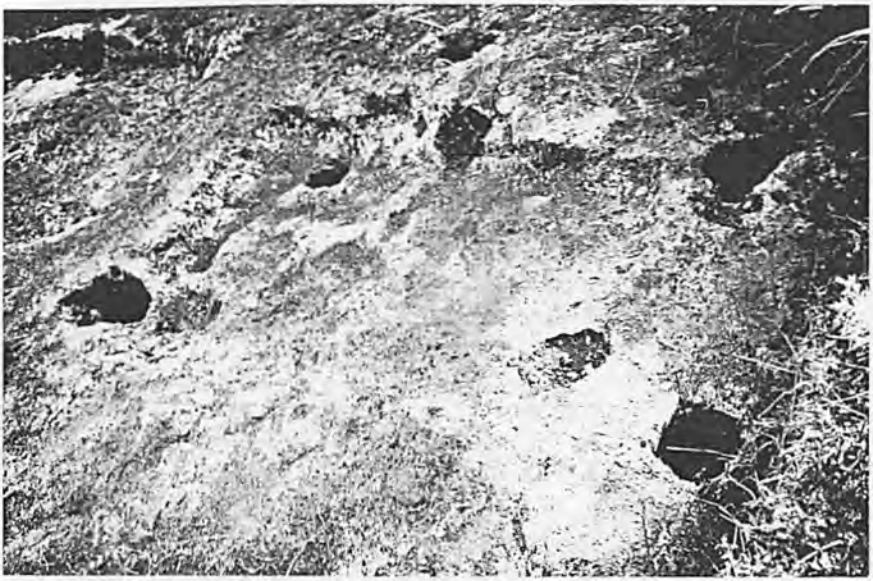
PL 6〔2〕 第2，7号竪穴 北より



PL 7〔1〕 第3，10号竪穴 南より

PL 7〔2〕 第3，10号竪穴 北東より

PL 8 第5，6号竪穴 北より



PL 9〔1〕　第8号竪穴　北東より

PL 9〔2〕　第9号竪穴　南東より

PL10〔1〕　第11号竪穴　北より

PL10〔2〕　第12号竪穴とピットA　北より

PL11〔1〕 ピットA，B 北西より

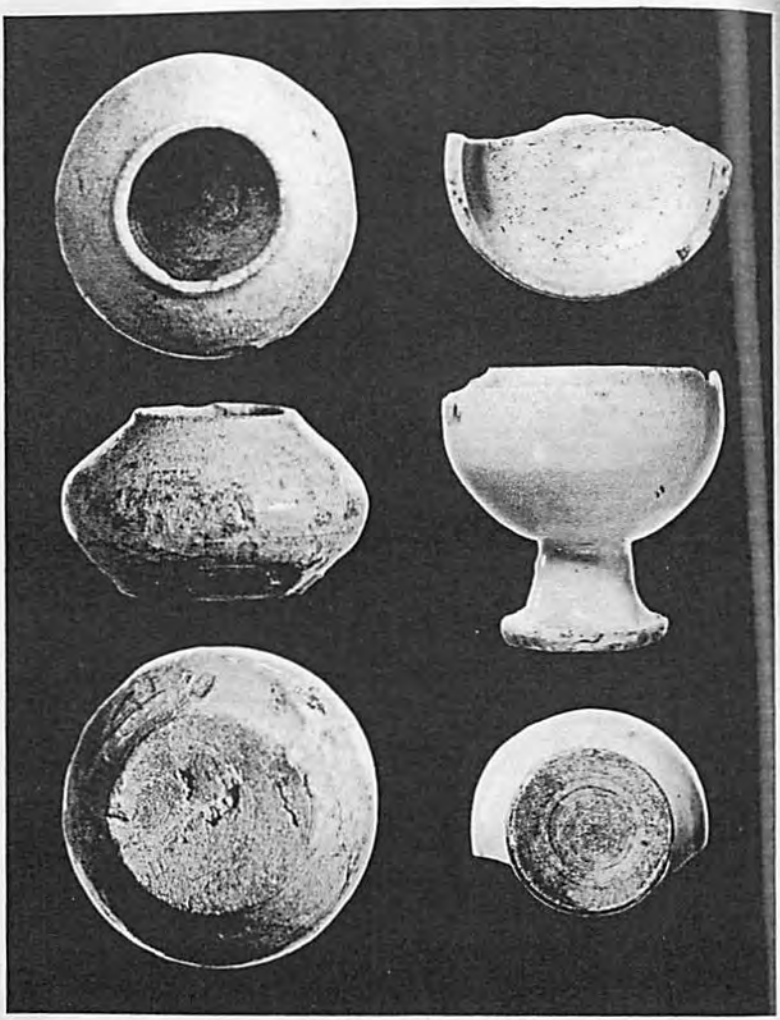
PL11〔2〕 ピットE

PL12〔1〕 建物Ⅰ 北より

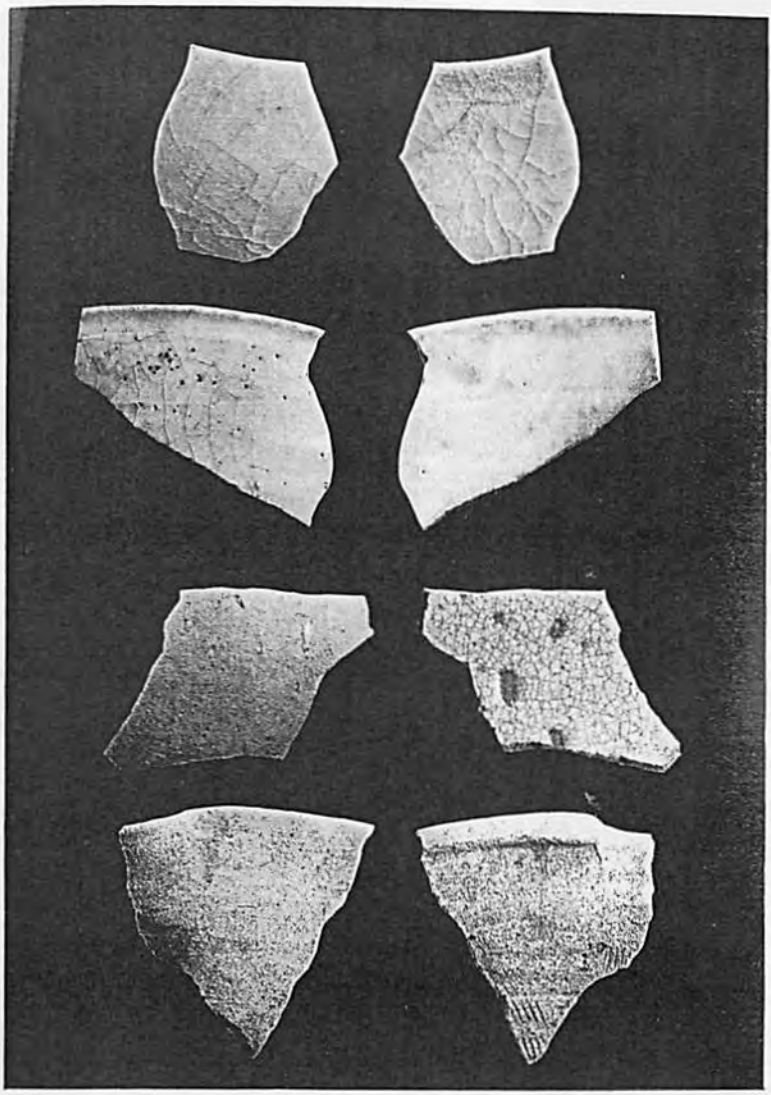
PL12〔2〕 建物Ⅱ 西より

PL13〔1〕　後北式土器，中段右は左側土器の裏面

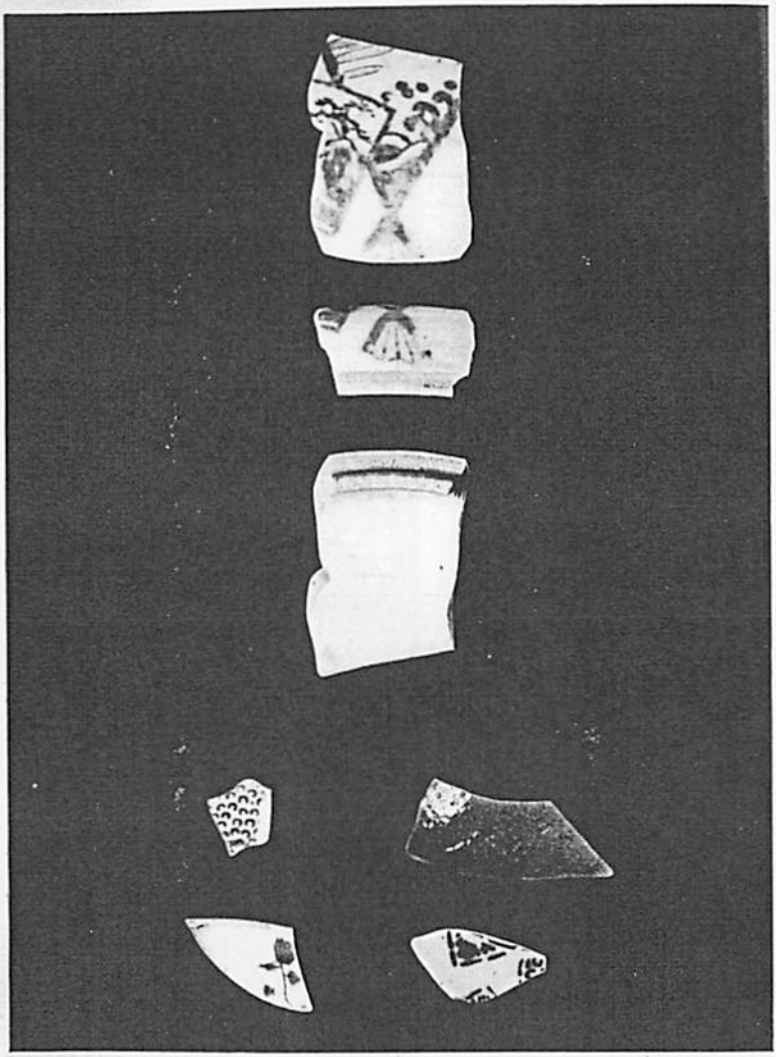
PL13〔2〕　天王山式，撚文式土器，石器



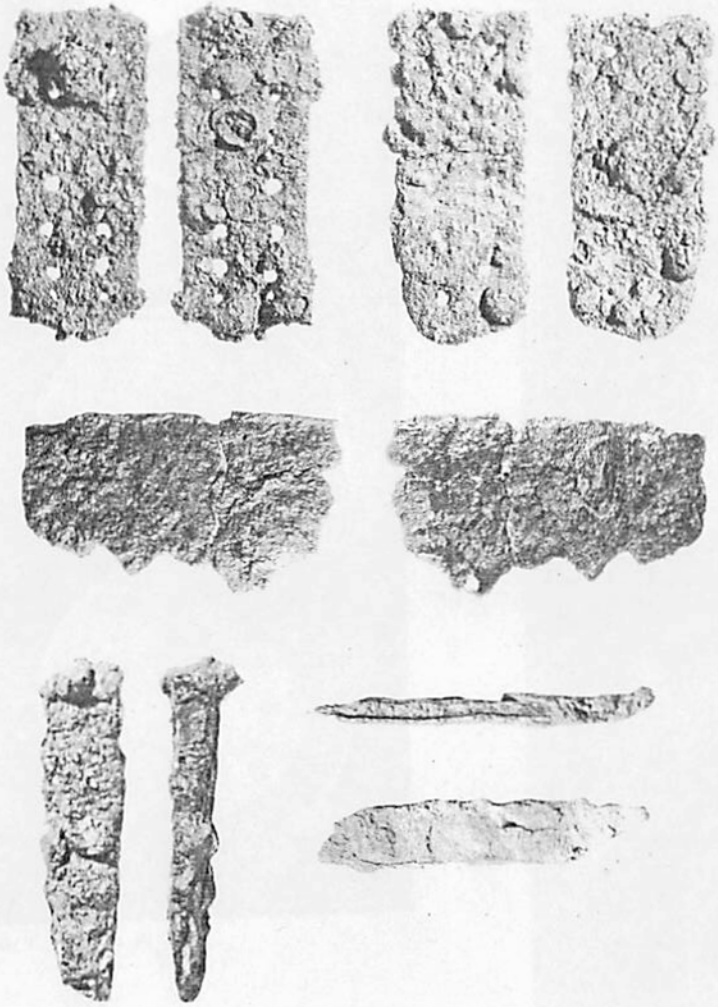
PL14　陶器　1 (左列)　4 (右列)



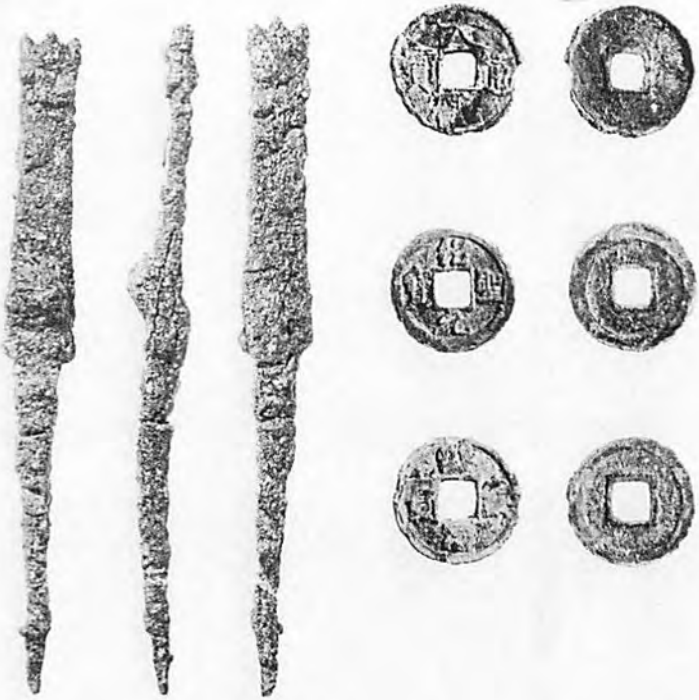
PL15 陶器2, 3, 5, 6



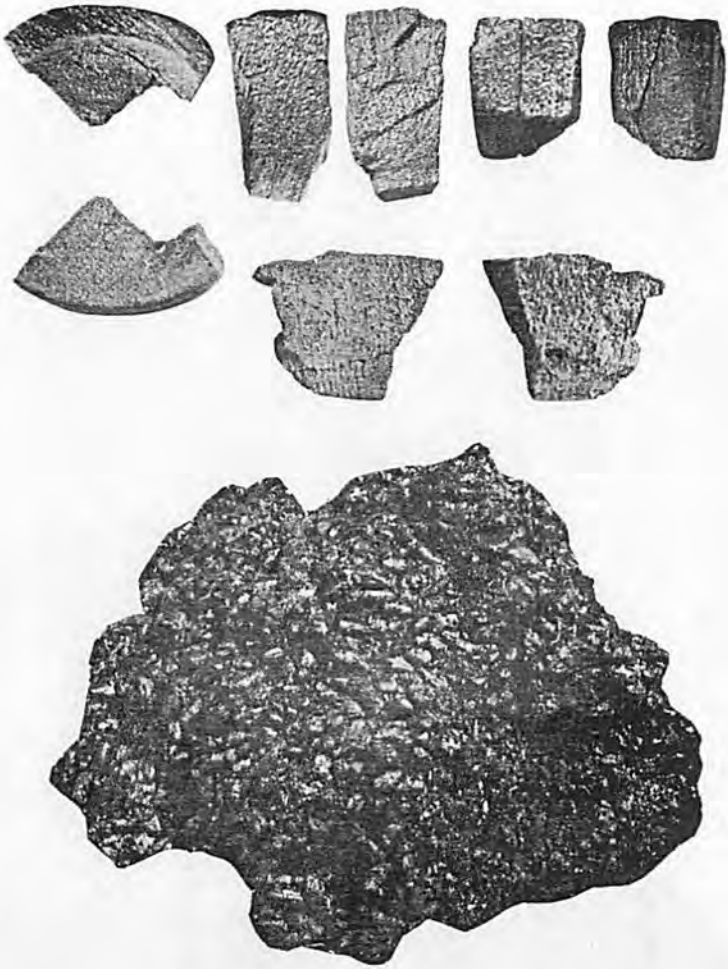
PL16 陶器7, 8, 9, 10, 11



PL17 鉄器 1, 2, 3, 5, 6



PL18 鉄器4，銭貨



PL19　上２段炭化木器片，下第12号竪穴出土炭化米

大館市史編さん調査資料第５集

大館市片山「館コ」発掘調査報告書

（代）奥山　　潤

１９７３・３

発刊　大館市三の丸 13－１

大館市史編さん委員会

印刷　大館孔版社　大館市谷地町後